

論文

群馬県における林間学校の普及と展開

—大正末期から昭和戦中期まで—

Diffusion and Development of the Open-air Schools in Gunma Prefecture
From 1923 to 1944平沢 信康
HIRASAWA Nobuyasu

抄録

我が国では大正期半ば以降、学校保健衛生への関心が高まるなか、小学校児童の健康問題が教育政策において重要な課題となった。

そうしたなかで、群馬県では 1921（大正 10）年 8 月に初めて林間学校が開設された。それは、前橋市内の伝統ある尋常小学校二校によって先鞭をつけられたものであった。桃井小学校と敷島小学校との合同開催のかたちで、前橋市敷島町にある「敷島公園」において 2 年間にわたり実践された先導的試行には、数多くの教育関係者が参観に訪れた。両校の実践の成功を受けて、その後まもなく、県内の他市町でも同様の林間学校が開設された。

本稿は、前稿「大正後期の群馬県における林間学校の誕生—前橋市立敷島尋常小学校と桃井尋常小学校による合同開設—」の続編をなすものであり、群馬県内における林間学校の普及実態、実施形態の異同と時世の変化に伴う変容、必要経費の推移、各実践の内容と特色および実施効果について明らかにした。

キーワード

林間学校、群馬県、虚弱児童、学校保健、学校衛生、健康教育、養護

（受付 2017 年 12 月 14 日、改訂 2018 年 2 月 13 日、公表 2018 年 2 月 27 日）

はじめに

前稿「大正後期の群馬県における林間学校の誕生—前橋市立敷島尋常小学校と桃井尋常小学校による合同開設」（『上武大学ビジネス情報学部紀要』第 16 巻、2017 年 3 月、1～37 頁）において、群馬県の県庁所在地である前橋市の小学校による林間学校の開設に至る経緯および 1921（大正 10）年と翌年の黎明期の実践の実態と特徴を明らかにした。本稿は、その続編である。

1921 年 8 月 1 日から 21 日までの 3 週間、前橋市の伝統校である桃井尋常小学校と敷島尋常小学校とによって現在の敷島公園で合同開催された林間学校こそは、群馬県初の林間学校であった。先行研究によれば、その実現は、群馬県勢多郡原之郷（現・前橋市富士見町）出身で前橋市専任学校医であった狩野壽平（1875～1941）のリーダーシップによるところが大きかった。

群馬県下における林間学校開設の先駆けとなった敷島・桃井の両尋常小学校の実践につ

いては、当時の学校衛生界のリーダー大西永次郎¹（1886～1975）が「本邦に試みられるべき夏季集落として、極めて模範的なもの」と称賛した²。林間学校は虚弱児童の健康回復に効果があるとされ、1923（大正 12）年から前橋市以外の小学校でも実践され始め、以後、群馬県内の主要都市の小学校へ普及していったほか、前橋市立幼稚園でも林間保育が実践された。

桃井・敷島両校の林間学校は全県的に注目され³、開期中、桐生・伊勢崎・高崎などの自治体の教育関係者が参観に訪れた。そこで得られた知見をもとに、開設場所はもとより実施主体や実施形態は異なるものの、大正末期以降、これらの市町において林間学校が開設され、さらに他の町村へも波及していった。

この頃の全国的な動向に目を転ずると、1921 年に 3240 ヲ所、1922 年に 4618 ヲ所であった林間学校は、1923 年には 5978 ヲ所に急増した⁴。翌 1924（大正 13）年、文部省学校衛生課が全国の地方長官に照会を発し、身体虚弱児童を調査した結果、全国の一般就学児童中に身体虚弱児童が占める割合は男 4.97%、女 5.14%、平均して全国の小学児童の約 5%であった。人数にすると約 50 万人に達しており、その数は年齢や性別によって著しい差異はないことが判明した⁵。新聞紙面においても、特別の養護施設によって保護救済を要する虚弱児童の存在が報じられ、このうち中産階級以下の虚弱児童問題は社会問題とみなしなければならぬとして、教育家の奮起を促す談話が、文部衛生当局談として掲載された⁶。

ところで当時、野外教育ないし林間学校に関して、以下の書物が刊行されている。

小田俊三『野外学校の学理と実際』弘道館、1922 年 6 月

亀島晟/石原正明『日本に於ける常設林間学校之実際』新進堂、1924 年 3 月

留岡幸助『自然と児童の教養』警醒社書店、1924 年 8 月

最初の書は、結核予防を目的とした「フェリエンコロニー」等についての、医学博士の筆になる研究書であり、指南書でもある。冒頭に、六甲高山学校や明石臨海学校のほか、ドイツ・リュューベックの林間学校、スイスの高山療養所の写真を掲げ、本文において国内外の林間学校や臨海学校を紹介している。世界初のフェリエンコロニーは、ロシアのセントペテルスブルグおよびバルチック沿海州に 1850 年に設置されたものとしている⁷。林間学校（林間聚落）は、同書の第二章第二節「平地又は丘岡の森林中で開設せられるもの」で扱われている。その中で、ドイツのシャロットテンブルグ市に 1904 年に開設された国民林間学校 Volkswald schule は、結核予防が目的であったとしている⁸。著者の小田が把握した範囲では、我国のフェリエンコロニーの数は大正 10 年に 47 ヲ所あり⁹、種々の報告から推計して虚弱児童は学齢児童のうち 1～5%いると見積もっている¹⁰。

第 2 の書は、1922 年に大阪市の御津小学校が大阪府泉北郡濱寺海岸（現・堺市西区）

諏訪の森に開設した常設の林間学校についての実践報告を含む教育論である。1 学区から虚弱児童を選抜して学術的・組織的に始められた、この諏訪の森林間学校（郊外学舎）の事業には校医として小田俊三が関与しており、同書冒頭に小田の「序」がある。同書は、全国小学児童に数十万人の虚弱児童がいると推定し、人口 5 万人以上の都市においては林間学校や露天学校あるいは戸外学校等を必ず設置すべきであると主張している¹¹。著者は、当時の林間学校について、単に流行的気分に支配されて主義も定見も研究もなく半ば売名的に開催するものが甚だ多いと批判している¹²。

第 3 の書は、1899（明治 32）年 11 月、東京巣鴨の 3600 坪の敷地に私立感化院「家庭学校」を開校した、我が国感化教育界のパイオニアの一人であった留岡幸助によって執筆された。留岡は土地払い下げを受けた北海道北見国^{さなぶち}社名淵（現在の遠軽留岡）1 千町歩の原生林を 1914（大正 3）年 7 月下旬から開墾し始め、農場とともに家庭学校の分校を開設する事業を軌道に乗せていた。彼は同書の序文で、我国の教育制度には人格的要素と自然的要素の二大欠陥があると主張している¹³。都会は近代文明の恩恵に浴すること大なる一方、その弊害を受けることもまた甚だしい場所であると認識する彼は、巣鴨や北見での経験をもとに、同書第 4 章と 5 章において新鮮な空気・水・土の健康回復・治療効果を論じ、自然療法を推奨した。第 6 章では、1899 年に林間保養所の設立を提唱したベルリン市のベッヒェル教授、1876 年に貧困児童をアッペンツェルの山間に携えて夏季植民を実施したスイス・チューリッヒ市のビオン牧師、1881 年に都市郊外での林間学校の設立を急務として首唱したベルリン大学のアドルフ・バギンスキー小児科教授といった欧州の先覚者とともに、1895 年に開設され模範的的制度として知られた「シャロテンブルヒ」林間学校を紹介している¹⁴。

林間学校や野外教育に関して造詣の深い識者によって、こうした言説がなされた時期に、群馬県では林間学校が前橋市以外にも普及し始め、同時に「林間学校」なる呼称も定着していった。文部省調査によれば、全国で実施された夏期施設（主に虚弱児童を対象とするもの）の数は、1922（大正 11）年に 681 ヲ所であったものが、翌 1923 年には 1384 ヲ所へと倍増している¹⁵。

昭和に入ると、1931（昭和 6）年 6 月に文部省が虚弱児童養護施設講習会を開催しており、10 年後の 1941（昭和 16）年 7 月 1 日に同省は虚弱児童の夏期施設に関して通達を発した。この間、1932（昭和 7）年 8 月には虚弱児童養護連盟（理事長・山川健¹⁶）が組織されている¹⁷。こうした虚弱児童を対象とした健康増進政策の推進を背景に、群馬県内各地において林間学校の各種実践が展開された。

大正末期から昭和戦中期における群馬県内の林間学校に関する研究論文は、管見の限り

皆無であるが、群馬県『群馬県史（通史編9）』（平成2年）に概説があるほか、前橋市立敷島小学校『敷島小学校百年史』（昭和48年）や前橋市立桃井小学校『桃井校百年のあゆみ』（同年）、前橋市『前橋市教育史（上巻）』（昭和61年）などにおいて言及されている。群馬県内の市町村レベルの地域史のなかにも関連記述が散見される。とくに『桐生市教育史』が多くの頁を割いて詳細な資料を掲載している。

ところで、『群馬県百科事典』中の「林間学校」の項目には、以下のような説明がなされている（執筆担当者：田村伸之）¹⁸。

体質虚弱児童の健康向上を目的とした保健的行事。本県では1921（大正10）年、前橋の桃井・敷島両小学校が現在の敷島公園を利用して行ったのが最初。夏季休暇中の3週間を利用して、午前と午後に分けて実施した。日課は望診・図画・綴り方・体操・水泳・睡眠・復習などが中心であった。その後、桐生教育会が1923年から水源地公園を利用して行ったほか高崎南小学校、安中小学校なども実施したが、戦争末期の1944年ころには廃止されている。

この記述および『群馬県史（通史編9）』により、群馬県の林間学校の歴史概要は把握できるが、林間学校の黎明期以降における県内普及の実態を詳しく理解することはできない。自治体のごとの実施主体の異同、実施形態の変遷、実施場所の移動、予算が明らかでないほか、桐生、高崎、安中のほか、どの市町村まで普及したのかも定かでない。また、県史や市史で比較的多くの頁を割いて林間学校紹介を行っている場合でも、ある特定の年度の日課等を史料として示してはいるものの、時系列的な変化（歴史的過程）を理解することはできず、断片的な歴史像に留まる憾みがある。

本稿は、大正末期の1923年から昭和戦中期の1944年までの約20年間における群馬県内における林間学校の具体的な開設状況と実施形態の変遷を明らかにするものである。まずは前橋市の敷島尋常小学校および桃井尋常小学校による林間学校の、黎明期以後の展開を検討し、次に群馬県内での林間学校の普及状況を明らかにし、前橋市の林間学校の合同開催への転換にふれ、最後に前橋市の「夏季学校」および桐生市の「夏季学園」への変質に言及する。

史料としては、幸いなことに、上毛新聞社が編集・発行する地元紙「上毛新聞」に関係記事を見出すことができる。同紙は1887年に創刊された群馬県の地方新聞であり、同社の記者が林間学校の取材を行っている。大正期に比して昭和期に入ると、上毛新聞における林間学校関連の報道頻度も掲載記事紙面の大きさも概ね漸減していくが、それでも林間学校の開校・閉校については戦中期まで継続的に報じられ続けた。本稿も、群馬県立図書館および前橋市立図書館に所蔵されている「上毛新聞」のマイクロフィルムおよび「上毛

新聞ライブラリー」(CD-ROM)を読み、その紙面に散見される当該記事を探り当て、史料として活用分析した。そのほか、前橋市総合教育プラザ内の教育資料館所蔵の一次史料である桃井尋常小学校の林間学校の日誌と会計簿、前橋林間学校の実施報告書をも活用・参照した。加えて、前橋市議会事務局所蔵の前橋市議会議事録、群馬県立図書館所蔵の桐生市林間学校の絵葉書にも目を通した。

なお、史料からの引用文については、原文の趣を損なわぬよう、旧字体の漢字表記はそのままにした。新聞記事のタイトルも同様とした。

I 前橋市における展開(大正12年から昭和3年まで)

前橋市の敷島尋常小学校および桃井尋常小学校による林間学校が2年にわたって合同開設された後、3年目の夏を迎えた1923年7月初旬、虚弱児童を対象とした林間学校の試みに対する批判が地方紙の紙面に紹介された。

最良の林間学校の設立を希望する和田登は「在来試みられた多くの林間学校は主に病弱者、劣等児のためのものであった、勿論それも結構、しかし私はそれ以上の必要を優等者の為に認めるものであります」と論じ、夏期休暇中、優れた児童をして偉大なる自然の懷に抱かしめ、荘厳なる大自然から感化を受けることの意義を力説した¹⁹。

同様の主張は、小学校とは校種が異なり、かつ私学であった成城中学校の校長であった澤柳政太郎(1865~1927)によってもなされていた。陸軍士官学校・陸軍幼年学校への全寮制予備校として知られた東京・牛込原町の私立成城中学校長として、澤柳は「通常以上の体質の生徒のため」の「林間教育」の先鞭をつけたのは成城が嚆矢であると自負し、それは「一つの精神教育である」と解説している²⁰。日本アルプスの中腹に開設した成城中学校の林間学校は「高山林間学校」と称して1918(大正7)年夏に数週間実施したもののだが、この中房温泉に開設した林間学校は病弱児の療養的処遇のための施設ではなく、健康な生徒を引率したもので、健康の増進もさることながら、自然科学的探究心を刺激しうるほか、大自然のもたらす徳育と美育に期待した実践であった。澤柳は林間学校の増加を歓迎しながらも、病弱児童を対象としたものに限局しないよう関係者の意識改革を求めている。

このような主張があったものの、群馬県における林間学校は、以後もほぼ一貫して尋常小学校の虚弱児童を対象として実践され、普及していった。例外は就学前教育の児童を対象とした「林間保育」であった。前橋における林間学校開設機運の高まりは、市立幼稚園へも波及した。

前橋市立幼稚園は、1922(大正11)年に私立前橋幼稚園が前橋市に移管されたもので、

それまで前橋市神明町に置かれていた分園が市立前橋幼稚園の本園となった²¹。

前橋市立幼稚園では、後援会役員会が援助して、1923年8月1日から3週間、敷島尋常小学校と桃井尋常小学校の林間学校の分岐点を開設場所とし、小出河原の松林で林間保育を実施することが検討された。同年7月11日午後1時から本園で、翌日午後1時から片貝町分園で、それぞれ父兄会を開催して設立の可否を論じた。幼児であるため距離の点から送迎が困難とされたが、保護者に依頼することとし、保母は万難を排して面倒を見ると意気込みをみせた。費用は1人当たり2円50銭（間食その他雑費）、テントやハンモックその他の遊具一切が桃井・敷島両校から貸与されることとなった²²。その後、父兄や後援会との折衝を重ねた結果、開設期間は8月1日から2週間と決定された²³。

第3回桃井小・敷島小林間学校

1923（大正12）年の敷島尋常小学校と桃井尋常小学校による第3回夏季林間学校は、8月1日午前10時から、田部井助役、佐鳥・安波・木村の各市議、狩野・稲葉両校医らの臨場を待って始業式を行った。式では秋山桃井小学校長による開校中の注意、助役と狩野校医の祝辞、鈴木敷島小学校長の訓話などがあった。桃井小学校では、事業費を前年の600円に加えて200円余を増額し、参加児童数も20余名を増して150名とした。児童は1週間足らずで体重は増加し赤銅色の肉体となったが、教師たちは気苦労のため痩せた。敷島小学校では午前8時に集合し、涼しいうちに健康診断、深呼吸、訓話があり、午前10時から30分間、間食として牛乳が分配された。午前11時まで学年に応じてお伽話や草相撲、昼食後は林間散歩、自由遊戯、水遊び、午睡とプログラムが組まれ、午後3時に間食が渡ると、まもなく爽やかな松風に送られて家路に急いだ。両小学校の林間学校の中央に位置する幼稚園側の林間学校では、野村極の努力により葭屋根の休憩所が設けられ、オルガンなども備えられた。静かなメロディに和して踊る無邪気な表情遊戯が終わり、浅瀬での水泳が済み、寝についた園児も、夕刻には自動車で帰路についた²⁴。

8月4日には、豊島群馬県学務課長が高村衛生主事を随え、小出河原に開設中の林間学校に至り、自然の中での児童の生活ぶりを視察した²⁵。

第3回における出席児童は、敷島が138名（欠席5, 6名）、桃井が150名（欠席10名内外）で、開設時にはいずれも細い虚弱な体質であったが、1週間後には見違えるほどの壮健な体になった。8月8日に敷島小学校で体重検査を行ったところ、100匁を最多として平均30匁の減少をきたしたが、これは贅肉が取れたためで、児童は非常に敏快に活動しており、水泳後5匁の牛乳を一気に呑みほすと報じられた。ハンモックは樹間に、午前には西北、午後は東南に吊るされた。幼稚園の林間保育は同年度が初めてのため、保母はもちろん保護者もかなりの注意を払っていたが、運動の過不足なく、理想的に行っていると

報じられた²⁶。

8月12日には、学外から上毛新聞社小供新聞の茂木記者、同囑託の斎藤総彦および師範学校の矢島胖らが小出河原を訪れ、桃井・敷島の両小学校および幼稚園児に対して、午前10時から三つに分かれてお伽講演をして「頗る盛況を極め正午閉會した」と報じられた²⁷。

桃井小学校は病弱児童以外の者（ただし虚弱性の者）を加えて定員150名としたが、実際の出席者は平均で135名程であった。8月21日に終了した後、同校の秋山校長は、参加児童が土地に親しみをもって通い、低学年ほど全ての点で効果があったことを認めた。体重は、10名ほどが減少したほかは平均120匁ほど増加し、脈量は3ないし7増加したと報告したうえで、林間学校の収容人員は150名を限度とすることを切実に感じたと述べ、設備を完全にしたいと付け加えた。伊東保乃麿校長に代わって前年に着任した敷島小学校第14代校長の鈴木圭吾は、毎年の効果に鑑みて、地の利を得ている学校のみならず、他校も一緒に同所に開設して病弱児童を厳選して市費で収容し、送迎は後援会費で充てれば、市民の保健上も有益であると述べた。森島幼稚園長は、試験的に実施してみたが、園児の食欲と体重が増し、家庭からも好評を得たことを報告した²⁸。鈴木校長の主張の実現は、1929（昭和4）年まで待たねばならなかった。

桃井尋常小学校の林間学校実践については、『大正十二年度 桃井林間学校状況』（桃井尋常小学校、和綴じ冊子：前橋教育資料館蔵）に詳しいので、以下、これに基づいて説明を補足する。

開催地として「勢多郡南橘村大字上小出ノ松林」を選定した理由としては、この地が「オゾン」の含有最も多く、「針葉樹ノ密林ニシテ空気清浄加フルニ、附近ニ川アリ砂原アリ又前方大利根ニ面シ眺望濶ケテ浩然ノ氣ヲ養ヒ健康ノ向上ヲ図ルニ最も適當ノ地ナリト認メタリ」と、前年の報告書の表現を踏襲している。

最初の2年は、春季体格検査の結果「栄養丙」と認定された者約百名を収容したが、この年は、「栄養丙」以外にも比較的虚弱と認めた者を収容することとし、約50名を増やした。校医の綿密なる検査の結果、収容した児童150名の学年別/性別内訳は、以下の通りである。

1年46（男26/女20）名、2年34（男18/女16）名、3年32（男20/女12）名、4年24（男8/女16）名、5年12（男6/女6）名、6年2（男0/女2）名²⁹

これにより、高学年の参加児童が少ないことが判る。以上の児童を5組に組分けして、色付きの肩章をつけさせた。開期中の出席者数は、平均134名であった。

設備として、教場、雨天収容場、事務所（テント2張）、湯呑所および湯呑、便所、物置、午睡場、午睡用釣床、日除け布、蒲ゴザ、相撲土俵、水泳場、水泳着干場、整理箱、橋梁、

アンペラ等を用意した。

なお、1・2 学年用と 3 学年以上用に分けて、2 種類の「林間学校の歌」が作詞作曲された。

この年の林間学校は、8 月 1 日から 21 日までの 3 週間、天候に恵まれたため、1 日も休むことなく林間において開催できた。参加児童は、毎日午前 8 時から午後 4 時まで、健康診断、深呼吸、各科復習、訓話、お伽噺、史談、体操、遊戯、唱歌、水泳、見学、散歩、午睡、間食といった日課を過ごした³⁰。毎朝、参集した神明町前橋幼稚園庭を午前 8 時に出発し、教員の引率により現地に到着した学童は、ただちに望診に臨んだ。午後 4 時になると、再び教員引率のもとに集合場所である幼稚園庭に到り、解散して各自帰宅させた。

救護体制としては、狩野校医と森校医助手が毎日出勤して児童の養護に努めたほか、日本赤十字社群馬支部が救護所を設け、奥津看護婦および医員を時々派遣して救護を担当した。校長ほか 17 名の教員が、毎週 6 名ずつ交代勤務で各組別に児童の教養の任に当たった。

栄養の増進を図るため、「間食表」が作成され、紅白鳥の子、水無飴、饅頭、ビスケット、塩煎餅、味噌付饅頭、アンパン、餅などの間食が児童に与えられた。

児童の体格へもたらした林間学校の効果としては、平均で、身長 1 分 1 厘、胸囲 3 分 5 厘、体重 57 匁、それぞれ増加した。最も増加の著しかった児童は、それぞれ 5 分、1 寸、370 匁増えた。概ね、皮膚の色沢が良くなり弾力は増し、感冒に侵されないようになった。筋肉の緊張度も握力も増した。内臓器官が調節され、肺活量が増え、腸内寄生虫も駆除された。頸腺腫脹や貧血、消化不良なども軽快するに至った。精神機能においても効果が認められ、参加した虚弱児童は元気旺盛となり、睡眠の質も良くなり、動作が敏捷となった。

1923 年度の実施経費についても『大正十二年度 桃井林間学校状況』（桃井尋常小学校）に記されているが、これとは別に『大正十二年度 會計簿 桃井小学林間学校』なる冊子があり、収入と支出に関する詳細な記録が残されている。それらによると、総支出額は 84 円 6 銭 56 銭で、その内訳は設備費 234 円 91 銭、間食費 309 円 43 銭、謝儀及び手当 204 円 88 銭、雑費 97 円 34 銭であった³¹。収入は 933 円 40 銭で、前年度よりも約 200 円増えた。その内訳は、前年度繰越金 120 円 40 銭、前橋市学齢児童保護会からの補助金 100 円、桃井小学校後援会経常費からの補助金 200 円、同校後援会募集の通学区内の 14 区の寄附金 420 円、有志寄附金 68 円、群馬県学校医会奨励金 10 円、李王世子下賜金 15 円であった。

なお、林間学校終了後も児童が規則正しい生活を継続するよう、保護者に対して奨励する文書を学校長が配布している。

期間中、演習見学のため前橋市および総社町方面を訪問して市井の状況や郡部の地形等を視察中であった朝鮮国王の嫡子が、小出河原に開設中の桃井小学校の林間学校を参観している。1923年8月19日午後3時、金武官を随えて林間学校に現れた李王朝の王太子を、間食を終えた児童が真黒になった裸体のまま出迎えた。李は秋山校長より説明を受け、20分余を林間に過ごし、続いて敷島小学校の鈴木校長よりも同様の説明を受けた後、上機嫌のうちに帰営した³²。李は1920年4月28日、日本の皇族の梨本宮守正王の長女・方子女王（1901～1989）と結婚していた。

第4回桃井小・敷島小林間学校

前橋市では、小出河原を中心とする民官有地20町歩の払い下げを受け、第二公園とする目的で研究がなされていたが、1923年秋には散策路、四阿3ヶ所、石のベンチを設け、関東に冠たる大公園を現出することとなった³³。内務省が「前橋市公園」と位置づけた同所に、同年8月13日に測量手が6,7人來ると報じられ³⁴、翌年7月には四間道路の開削に着手する予定となった³⁵。こうした小出河原の第二公園計画を「俗化」として嫌った桃井小学校は1924（大正13）年、林間学校計画の中止を検討したが、結局は例年通り、前橋市岩神町の北端に隣接する勢多郡南橘村大字上小出の松林において開設した。

『大正十三年度 桃井林間学校状況』（桃井尋常小学校）によれば、場所の選定理由も開催期日・収容人員・設備・実施体制も前年度を踏襲し、予算額も前年度の支出と同額の847円とした。この年も天候に恵まれ、二日間を除いて林間で開催することができた。150（男女各75）名を5組に分け、肩章の色によって組別を明らかにした³⁶。学年別にみると、1年25（男14/女11）名、2年39（男24/女15）名、3年40（男19/女21）名、4年14（男10/女4）名、5年17（男3/女14）名、6年15（男5/女10）名であり、前年度に比して、1年生が減り、6年生が増えた。全体では毎日平均して131人が出席し、校長のほか18名の職員が林間学校勤務を担当（毎週6名ずつ交代勤務）した。

日課も前年を踏襲し、ほぼ同じであった³⁷が、間食の提供物には、かなり変更が加えられた。「間食予定表（大正十三年度）」には、スウィート、ミソパン、落雁、焼饅頭、浅草豆、堅パン、氷砂糖、玉子パン、アンパン、クリームパン等が列挙されている。

収入は878円84銭で、その内訳は、前年度繰越金86円84銭、前橋市学齢児童保護会からの補助金100円、桃井小学校後援会経常費からの補助金200円、同校後援会募集の通学区内の14区寄附金410円、有志寄附金82円であった。総支出額は868円90銭で、内訳は設備費251円38銭、間食費314円3銭、謝儀及び手当222円、雑費81円49銭であった³⁸。

このほか、キャラメル200個を寄贈した者や写真25枚を提供した者、林間学校におい

て無料で児童の理髪にあたった前橋市青年理髪業組合員など、参加児童は市内の篤志家に支えられた。加えて開期中、雨天の日には児童のために「娯楽会」が臨江閣の別館で催され、上毛新聞記者の寄付による講談・お伽劇・手品、狩野校医らの尽力によって集められた有志よりの寄附品を用いた福引が挙行された。8月13日には、午前9時から小出河原で林間学芸会が催された。唱歌や遊戯など数十番のプログラムを午前11時に終了して、五日飯の饗応があり、狩野市医や幼稚園保母たちも陪食した³⁹。

実施効果を測るため、出席日数が三分の二以上の者について、この年度も身長・体重・胸囲・握力・皮膚・頸線肥大について統計表が作成された。平均で、身長2分、胸囲2分4厘2毛、体重74匁それぞれ増加し、最も増加の著しかった児童では、それぞれ5分、0.6分、370匁増えた（握力は平均で4度増えた）。

虚弱児童らの内臓器官は調節され、呼吸器・消化器ともに機能が向上し、食欲も著しく増進、頸腺肥大症や腺病質体質も新鮮な空気や血行が盛んになったため軽快するに至った。収容者中4～5人に呼吸器の異常者がいたが、開期中に治癒した。精神機能においても効果が大で、参加児童は元気旺盛となり、睡眠も良くなり、動作が敏捷となった。

なお同年度には、和紙に毛筆で記された『大正十三年度 桃井林間学校状況』とは別に、その要点を整理して大型洋紙に印刷した『大正十三年度 桃井小学校夏季林間学校状況報告書』が作成された。こうしたスタイルの報告書は、以後も踏襲された。

一方、この年、敷島尋常小学校は、第二公園から少し離れた前橋市内の「観民山」の林で林間学校を実施した⁴⁰。観民山は、徳川家康の家臣で川越城主（1万石）であった酒井河内守重忠が関ヶ原の合戦の功により1601年に厩橋城主（3万3千石）に封せられ、厩橋城に近い風呂川の改修に力を注いだ際、守護神「観民稻荷神社」を祀った地である。また「観民」という地名は、五代藩主の酒井忠孝が1690（元禄3）年5月、同神社境内に「観民亭」という別荘を建て、近傍の茶屋を移して開き、家中の遊興の場としたところから名づけられた、とも伝えられている。この茶亭は利根川に臨む景勝地で、「前橋十二景」の一つとされた⁴¹。

1924年8月4日には、敷島小学校の林間学校参加児童120名および教職員に対して2斗1升の牛肉飯が昼食として提供された⁴²。同月11日午前10時より同校で催した学芸発表会は、児童の唱歌、お伽噺、対話その他の発表があり、盛会裏に午前11時半に終了した⁴³。

なお中川小学校では、「夏季教養所」を希望制で開設し、教師11名で対応した。出席児童数は68名であったが、翌年には100名に増えた。日課は、水浴、湯浴、体操、遊戯、作業、給食、学習であった。

第5回桃井小・敷島小林間学校

1925（大正14）年8月1日午前9時から桃井小学校および幼稚園の林間学校の開所式が小出河原の松林の中で挙行され⁴⁴、同時に中川小学校の夏季教養所でも開所式を挙行した。同校では5日午前8時から盛大なお伽会を開催する予定であった⁴⁵。

幼稚園児たちは、降雨で濁った利根川の向こう岸に、上越線の汽車を見、青い帽子をかぶりシャツ一枚で働く赤羽工兵隊の兵士の姿を見ると、口をそろえて声援を送った⁴⁶。

日露戦争当時、工兵第一大隊の一部と近衛工兵大隊の一部が交互に前橋に来訪した。明治末期になると赤羽工兵隊や水戸工兵隊などが交互に来橋して架橋演習を行った。まもなく赤羽工兵大隊の誘致運動が起こり、工兵廠舎が前橋市の岩神町に建設されることとなり、1907（明治40）年に完成した⁴⁷。

1925年度の敷島小学校の林間学校は、この岩神町工兵バラック裏の櫛林内に開校され、栄養不良児のほか健康面で通常の実費生60名も参加して新鮮な空気を吸入し、健康体を鍛えた。21日間に及ぶ期間中、8月4日に全児童へ肉飯の饗応があり、6日には大日本理髪師会（神明町・永見会長）の会員である青年理髪師によって無料で散髪が行われ、13日は水上運動会を常設プールで挙行し、8日と18日の両日に学芸発表会を催す計画であった⁴⁸。

桃井小学校は小出河原で開設したが、開始後に隔日の降雨が、中旬以降は連日の豪雨に見舞われた。天候不良に悩まされた児童は運動不足を余儀なくされた⁴⁹。

この年の秋、勢多郡南橘村小出河原の松林について、前橋市は公園名を一般市民に懸賞公募した。その結果、1925年10月30日、前橋の郊外公園「敷島公園」と命名された⁵⁰。この年、木村市長の任期満了に伴い、後任として竹内勝蔵を市長に推薦し、同氏が前橋市長に就任した。

第6回桃井小・敷島小林間学校

1926（大正15）年7月、桃井・敷島両小学校では、小出河原の松林中に林間学校を開設する準備に着手した。ただし、桃井校で従来使用していた敷地は常設競馬場に充てられたため、お艶ヶ岩の上流の松林内へ移動することとなった⁵¹。同月26日には、夏季林間教養所に参加する少年少女150名が狩野校医の健康検査により選出された。3週間の開設経費として計上された770円には、同校後援会から200円、学齢児童保護会から100円、各町分担の寄付金420円が充てられ、この予算内で、1週間に一度、昼食を参加児童に振る舞うことができた⁵²。

8月1日からは、例年同様の行事と日課が行われた。初日には、小橋川刑務所長、二瓶課長、本間学務主任、阿部市参事、降旗市議らが来場し、秋山校長や中畠主席訓導の説明を聴取した。江原三郎、周東九平、小橋川ら篤志家から多大の寄附があり、カロリー本位

の料理がふるまわれた。なお同年度には、父兄の諒解のもとに、中等学校入学志望者の特別授業も開始された⁵³。両小学校の林間学校と幼稚園の林間保育は、予期通りの成績を収めて、各所共に21日正午に閉所式を挙行了した⁵⁴。

なお、中川小学校では、同年8月16日に職員12名と学務委員の橋本国太郎の支援により、夏季教養所の児童が南橘村田口利根川水泳所に出かけ、19日には県視学の埴田好造が視察した。ここに、同校が林間学校実践にチャレンジした形跡が窺える⁵⁵。

第7回桃井小・敷島小林間学校

前橋市立桃井小学校と敷島小学校および幼稚園では、1927（昭和2）年8月1日から林間聚落を開設し、同日、開校式を挙行了した。市から中島視学と狩野市医、日赤支部から新任の鳥海主事が列席した⁵⁶。同年、前橋市立幼稚園（森島園長）は3週間の林間保育を実施した⁵⁷。林間学校と林間保育は21日に終了したが、栄養を十分摂取し、新鮮な空気を吸い、清冽な利根川の分流で水を浴び、適度に午睡を貪ることで、児童の皮膚は黒くなり、体重を増し、筋肉各部が均一に発達するなど、例年以上の好成績を示した⁵⁸。

第8回桃井小・敷島小林間学校

前橋市立桃井小学校では、1928（昭和3）年8月1日から敷島公園内の松原において林間学校を実施した。後援会で費用負担する80名の栄養不良児のほかに、栄養「乙」評価を受けた児童の中で、家庭で参加費用を負担できる者70名を加え、合計150名を収容することとした⁵⁹。同年7月、敷島小学校では、岩神町工兵バラック裏の櫓林（横地桂三郎所有）で林間教養に当たべく準備を開始した。鈴木校長は滋養のある食品の摂取に力を入れ、昼食の献立に意を払った。ただし同年度の両校の林間学校は、台風襲来のため延期を余儀なくされ、8月3日からの開校となった⁶⁰。

なお前橋市立の中川（明治7年創立）、久留万（大正2年に市内各小学校の高等科児童を集めた）、城南（大正12年新設）、城東（昭和2年新設）の各小学校⁶¹では、校内の日蔭を利用し適宜教養を施すべく計画した。創設もない城東小学校では、3週間の期間中5-6回、自動車で児童を敷島公園へ輸送して環境転換の効果を挙げようと図り⁶²、林間学校実施への意欲を示した。

各校の林間聚落開設中、各所を巡回した狩野校医は、21日の期間中8日間も降雨があったものの、身体検査の結果は良好であったと語った。8年前に多かった内臓下垂症の児童は皆無となったが、血圧と肺活量が年齢相応に発達していない憾みがあり、呼吸運動に力を注ぐべきであると指摘した⁶³。

前橋市の専任学校医であった狩野壽平は、この年にまとめた『私の学校衛生に対する半生涯』において、「新しき空気、紫外線多き日光、清浄な土地にして然も樹木多き所に於て

自然に親しむは体質改善、健康増進の基」と、改めて林間学校の意義を強調した。

なお、前橋市乙種学事会で学校衛生施設研究会を開くにあたり、狩野壽平に乞うて印刷された『学校衛生ニ関スル研究』（昭和3年10月）の中で、前橋の「林間学校の父」と評される狩野は林間「コロニー」という表記を用いている⁶⁴。同時期に発表された狩野壽平『学校衛生施設概要』（前橋市桃井尋常小学校、昭和3年10月）によれば、林間学校経費（昭和3年度予算）763円80銭の内訳は、繰越金63円80銭、前橋市学齡児童保護会補助金100円、学校後援会200円、通学区内学区の寄付金370円、有志者寄附金30円であった⁶⁵。

なお前橋市立幼稚園では、昭和3年7月25日から8月10日までの17日間、敷島公園の松林内において第6回林間保育所を開設した⁶⁶。

II 前橋市以外の県内普及

群馬県の林間学校は、前橋市立の尋常小学校2校により黎明期を迎えたが、その後、やや形態を異にしつつ、高崎市・桐生市・伊勢崎町・境町・大胡町といった県内各市町へと広がっていった⁶⁷。1921年と翌年に桃井小学校と敷島小学校により開催された林間学校の様子を参観した県内の学校教育関係者は少なくなかった。そうした視察が活かされて、1923年以後、前橋市以外の自治体の小学校でも林間学校が開設されていった。

1924年に文部省学校衛生官となった大西永次郎が、群馬県における夏期体育施設状況視察のため、1926年8月11日と12日の両日、前橋、高崎、伊勢崎、桐生の3市1町における林間学校等の状況を塚越県視学の案内で視察している。大西衛生官は、群馬県の林間学校が施設及び位置の良い点において全国でも稀に見るものであること、前橋市の久留万、中川、城南の3校で行っている病弱児童に対する特別施設も極めて適当で良好な成績を収めており、群馬県のように規則的に統一された林間学校は全国に少ないと賞讃を惜しまなかった⁶⁸。

高崎における実践

1922（大正11）年8月下旬、前橋市の林間学校の状況等の視察を終えた高崎市の各学校長と今井教務課長らは、次年度から林間学校の如き夏期自由教育の施設をなす計画を抱懷したが、高崎市には好適な場所がないことに頭を悩ませていた⁶⁹。

そこで1924（大正13）年に高崎中央小学校では、前橋市の中川小学校の「夏季教養所」と同様のプログラムを「夏期学校」と称し、自校の校庭と校舎を使用して開催した。校医の検診によって選定された身体虚弱児120名を21日間収容し、午前8時から正午まで、体操、図画、唱歌、学科復習といった日課を課した。費用は市教育会と同校後援会が負担し、児童からは徴収しなかった。中央小学校は大正15年にも8月6日から27日まで「夏

期教養」と称して開催（13日から15日は休）し、経費146円25銭（市教育会負担60円、後援会負担86円25銭）で虚弱児童70名を校内に収容した。これも、午前8時に開始し正午に解散する午前開催のプログラムで、職員が毎日3名ずつ出勤した。日課は学科の復習、休憩、体操、間食、談話、図画、唱歌、遊戯、昼食であり、正座・瞑目・深呼吸を適宜行った。なお高崎市北小学校では、烏川河原（烏川と碓氷川の合流地域でアカシアの林間）を利用して林間学校を開設したと言われる（年度不詳）⁷⁰。

1925（大正14）年度、高崎中央小学校のみならず北小学校も校内で夏季教養所を開いた。前者では8月1日から21日まで63名を収容して2組体制として午前8時から正午まで、後者では8月1日から20日（13日より5日間休み）まで54名を収容して午前7時半から午前11時半まで開設した⁷¹。高崎東尋常小学校においても、「薄弱児童ノ健康ヲ保護増進シ兼テ学科ノ復習ヲナサシムル」ことを目的として、同年8月1日から20日までの20日間、午前7時半より第4学年以下の児童41名を「夏季教養室」に収容した。日課は訓話、お伽噺、唱歌、遊戯、水浴、学科復習、郊外運動で、滋養に富む間食を毎日1回与えた⁷²。

高崎市では市立南小学校の林間学校が特筆されよう。同校においては、病弱児童を対象とする暑中休暇中の林間学校が数年来計画されたが、経費等の関係で実行の機会を得なかった。ようやく1925年に実現し、8月1日から12日まで碓氷郡八幡村少林山達磨寺境内において開設された。土屋校長ほか各受持主任らが毎日、高崎駅から群馬郡八幡駅まで汽車で通い、駅から少林山まで徒歩で往復した⁷³。収容児童は1年から3年までの75名で、これを3組に分けた。黄檗宗の禅寺である少林山達磨寺には午後4時まで滞在し、間食を午前午後1回ずつ与えた⁷⁴。同校では1927（昭和2）年も少林山達磨寺で8月1日から林間学校を実施したが、3日から5日まで雨天のため中止して校内で補習教育を施した⁷⁵。同校の林間学校は昭和4年度にも開催された。同年8月1日午前7時45分、高崎駅発の信越線の列車にて出発した正木校長以下職員生徒100余名が群馬八幡駅で下車し、そこから少林山達磨寺の境内に至った。休憩後、授業および遊戯をして午後5時に高崎駅に戻った。同校では、この日課を8月12日まで毎日継続した⁷⁶。

太平洋戦争下においても、高崎市立南国民学校では、1943年7月26日から8月6日まで碓氷郡八幡村の八幡神社境内で夏季林間学校を開設し、初等科1年から4年まで約160名を収容した⁷⁷。

高崎市内の他の小学校では、昭和2年8月1日から12日まで校内や公園等の涼しい場所を選んで夏季特別施設を計画し、修身・算術・国語等の学科の復習、体操、遊戯、談話、深呼吸、静座という日課を児童に過ごさせ、後援会の好意で牛乳・パン等の栄養食が提供

された。こうした実践は2～3年前から実施されており、成績良好であったという⁷⁸。

なお高崎盲学校では、1935（昭和10）年8月7日、群馬県碓氷郡豊岡村（現在の高崎市下豊岡町）の青眼山薬王寺（天台宗）に林間学校を開設し、納涼かたがた学科や実習を行い、栄養食を配給し、福引等の余興も準備した⁷⁹。

伊勢崎町における実践

1921（大正10）年7月20日に佐波教育会から独立した伊勢崎教育会は、月例講演会などの事業により学校教育の振興に寄与したが、なかでも1923（大正12）年度から開始された林間学校は、虚弱児童の体力増強に効果を挙げ、昭和13年度まで伊勢崎教育会による恒例行事となった。期間は8月1日から21日までの3週間で、伊勢崎の名刹「華蔵寺」において開催された。華蔵寺は天台宗の寺院で、正式には「丘林山浄土院華蔵寺」と称し、現在は公園遊園地となっている。

伊勢崎の林間学校長は、伊勢崎教育会長であり伊勢崎尋常高等小学校長であった末至磨大洲が兼務した。第1回林間学校（大正12年度）の収入は707円92銭、支出は628円24銭（決算：残金79円68銭）で、初回の収容者数は111名であった（以後100人ないし130人程度で推移した）⁸⁰。

第4回林間学校（大正15年度）の開校式への出席案内状は、伊勢崎教育会と伊勢崎町学齢児童保護会の連名で出されている⁸¹。131名を収容した第4回林間学校の報告書は、開催場所について、次のように評している⁸²。

華蔵寺公園ハ、林間学校ノ理想的境地デアリマス。寺院ノ神秘、樹林ノ涼味、沼池碧景、環境ノ閑寂等相共ニ天然自然ノ学園デアリマシタ。

伊勢崎の林間学校の収容児童の選定方法と日課は、前橋の林間学校と同様であるが、「両学校医ノ協議詮衡」とあるように2名の学校医が選んだこと、高等小学校児童も参加したこと、午睡時間が午後2時から4時まで設定され「退散時刻」が午後5時と遅いこと、学齢児童保護会の補助金が400円と多額であることの諸点で異なっている⁸³。

職員体制は、学校長の下に主任1人と副主任4人を置き、教員16名（副主任を含む）、学校医2名、看護婦1名で対応し、児童の組分け編成は、男女別に異学年混成とした。弁当を毎日持参させたが、4日、12日、20日には昼食（五目、親子）を給した。毎日午前10時から牛乳とパンを給与した。午後の間食は遅く、午後4時から饅頭、飴、パン、塩煎餅、馬鈴薯、水菓子、ビスケット等が与えられた。身体検査統計表のチェック項目は、発育概評、栄養、脊柱、皮膚、頸腺肥大、胸部構造、呼吸、腹部、扁平足とあり、前橋のものと若干異なる。第4回林間学校の収入は730円、支出は681円57銭であった（決算：残金48円43銭）。来賓については、1日に石川泰三町長、助役、区長会議長、区長、町

会議員、校医が来校し、5日には日赤群馬支部、愛国婦人会群馬支部主事、群馬県社会主事、助役が、10日は桐生市教務課長、12日には文部省学校衛生官大西永次郎、県視学塚越輝平、石川町長らが参観に訪れている⁸⁴。

第6回の様子は『伊勢崎林間学校日誌』（昭和3年8月21日）⁸⁵に記録があるので、以下に紹介する。同年8月1日、雨天のため小学校講堂を借用して始業式を催し、敬礼、挙式宣言、君が代合唱に続いて未至磨学校長式辞、町長告示、学校医祝辞、敬礼、退席といった式次第であった。来賓として、学校医、大利根新聞記者、商業学校長、区長、方面委員、町会議員、教員が参列した。日本赤十字社群馬支部から新井よし看護婦が派遣され、毎日出勤した。日課は前橋市の林間学校とほぼ同様であったが、林間又は本堂で行った午睡の時間が午後2時から4時までと長く、退散時刻は午後5時であった。8月5日、12日、20日には弁当を支給した。組編成は、1組が1・2年男子、2組が1年から4年までの女子、3組は3年から6年および高等科の男子、4組は5・6年と高等科の女子とした。教師の高田富次考案の律動的行進体操を課し、野村一雄創作の童話に児童は喜んだ。初日の参観者は父兄45名であった。2日目は律動的行進体操を裸体体操に代えた。林間学校動作遊戯も行った。尋常1・2年生は自動車で通学させることとし、十王自動車商会と契約して、3日目から実施した。5日には石川町長、羽鳥県視学、塚田商業学校長らの参観があり、華蔵寺裏庭で記念撮影をした。5日まで降雨に見舞われ9日までは雨天または曇天であったため、10日に初めて水遊をさせた。当初120人収容したが、途中の入退学者があり、終了時の在籍児童は105名に減っていた。21日の修了式には、町長、助役、教師、父兄ら50名以上の来校者があった。

第7回（昭和4年度）以降は、教育会の資金と寄付金で運営された。伊勢崎では、教育会が主催して1930（昭和5）年度も華蔵寺において林間学校を開設することとされた⁸⁶が、この第8回目の様子は『伊勢崎林間学校』（昭和5年8月；前橋市立図書館蔵）に詳しい。第7回までは伊勢崎尋常高等小学校の児童のみを収容したが、第8回からは伊勢崎尋常小学校と伊勢崎南高等小学校の両校の児童113名を収容した。伊勢崎町、伊勢崎学齢児童保護会、華蔵寺、華蔵寺区青年会および教育会の関係者の援助により実現したものであった。日誌によれば、開校式に町長、助役、町会議員、父兄約50名が来会した。弁当を持参させ、昼食に味噌汁を提供した。自動車での送迎を行い、開校式と閉校式では唱歌君が代を歌い、雨天時は室内で授業した。伊勢崎の林間学校に特徴的なのは童話を採用したことと、場所柄「本尊様（釋迦牟尼佛大和尚）に朝夕挨拶すること一敬神崇祖」と会長が訓話した点が挙げられよう⁸⁷。

伊勢崎町教育会では、1931（昭和6）年7月29日、北小学校において総会を開催して

役員選挙を行い、南小学校長の萩原彦吉を会長に選出したうえで夏季事業を協議し、林間学校を8月1日から21日まで華蔵寺において行うことを決定した。南北両校の尋常科児童のうち栄養不良児や身体病弱児を両校医が検査して、父兄の希望を求め、南校50名、北校60名を選び、計110名を収容することとした。出張する職員の指導の下に、児童は学科、体操、水泳、唱歌、お話、午睡などの日課を楽しく過ごしながらか健康な身体を養う方針であった⁸⁸。

伊勢崎町教育会では、1934（昭和9）年8月1日午前8時半から第11回夏季林間学校の開校式を華蔵寺において挙行した。収容児童数は130名で、式後に身体検査を行った⁸⁹。伊勢崎町教育会は昭和11年にも開催し、8月1日午前8時半から華蔵寺公園で夏季林間学校の開所式を挙行した⁹⁰。伊勢崎では第16回（昭和13年度）まで開催された記録がある⁹¹。

桐生市における実践

桐生町は1921年3月1日に市制施行された。同年8月には、山田郡および桐生市連合教育会主催により、動的教育に関する夏期講習会が開催され、兵庫県明石師範学校主事の及川平治の講話が小学校3校であった⁹²。このように、大正新教育の余波はこの地方にも及んでいた。そして、翌年開設された前橋市の林間学校の参観には桐生市からも教育関係者が参加した⁹³。

桐生の夏季林間学校は、1923（大正12）年8月1日から21日まで、同市外の丸山公園下の東洋織布株式会社所有の櫓林に開設される計画であったが、同所はいささか危険であるのみならず、児童衛生上、不適当とされたため、同市新宿吹上地内（両毛整織会社裏手）に変更された。ここには約百名の児童を収容できる櫓林があり、水泳場も附近の渡良瀬川に設置して青年会に監督を依頼することができた⁹⁴。

この桐生市初の試みに対して、江原赤岩堰水利組合長が開設さるべき所有地を進んで提供し、市議会議員の濱野徳次郎ほか一名が児童に与える間食として牛乳・卵等の寄付を申し出たほか、小学校医4人が事業費として40円を寄付するなど、市内有力者による支援がなされた⁹⁵。

桐生市の第1回林間学校は、同年6月25日以降「林間学校開設協議会」を市役所で開いて協議（3校医、各小学校長、会長、副会長、助役、幹事が出席）して準備され、桐生市教育会の主催により市内の東西南北4尋常小学校が連合して実施されたものであった。「林間学校ノ趣旨」は、明治維新以来、我国の産業は未曾有の進歩を遂げ、文化も燦然と揚り欧州諸国と比較して遜色ない域に達したが、教育に関しては教授訓練の方面に偏っていると評し「最モ大切ナル児童養護ノ輕視放任セラレタル事実」を現代教育の一大欠陥と指

摘したうえで、児童の頭痛・貧血・食欲不振など「何レモ皆新鮮ナル空気ノ欠乏ニ由来スルコト多シ」として林間学校開設の意義を謳った。収容児童は百人を見込み、各校から職員5人が、学校医は交代で、各校小使は2人ずつ交代で、それぞれ毎日出勤する体制を組み、看護婦は日本赤十字社群馬支部に依頼して派遣を乞うた。水泳場を附設し、開催中2回昼食を給し、間食配当表は学校医が定め、学課配当表は小学校長が定めることとした。予算案は、設備費644円、間食費219円、謝儀及手当金186円、雑費180円の合計1229円で、収入は各小学校後援会より1000円、桐生市教育会から200円、有志からの寄附金29円を見込んだ。開催地の地理的条件として「西ヨリ南ニ渡良瀬ノ清流ヲ回ラシ、河ヲ隔テテ眺望遥ニ開ケテ遠ク赤城榛名ヲ望ミ、近クハ広沢山指呼ノ間ニ連ナリ、三伏ノ候涼気常ニ湛ヘ空気ノ清浄ナルコト海浜ノ如ク、真ニ児童ノ保健上最好適地タル大自然境タリ」と記している⁹⁶。

新宿吹上河原の赤岩堰入口際の櫓林内に開催された桐生市第1回林間学校は、8月1日午前9時から開所式が挙行され、前原市長、学務委員、校医らが臨席した。収容された虚弱児童は96名で、参加した4校の後援会は250円ずつ合計で1千円を開設費用として寄附した⁹⁷。

「体操教程」表や「水泳前ノ準備運動」表が作成され、唱歌種目と遊戯種目も事前に用意された。午前10時に牛乳が配給され、間食は味付きパン、ビスケット、団子、馬鈴薯、饅頭、カステラ、煎餅、キャラメル等で、前橋の実践と同様であったが、ハンモックは用いられず、傾斜度自由の木製寝台椅子を採用した点が桐生林間学校の特色であった。終了後、体重は全児童平均で96匁増した⁹⁸。

桐生市教育会の主催による第2回林間学校は、1924（大正13）年8月1日から21日まで渡良瀬沿岸の錦櫻橋畔で開設された⁹⁹。各小学校に登校した参加児童を錦櫻橋畔まで乗合自動車が送迎した。桐生に自動車が珍しかった時代ゆえ、児童は自動車に乗れることを喜んだ。林に到着すると、児童は掘立小屋の物置から蜜柑箱に紙を張った机を取り出し、ゴザの上に並べた。始業の鐘を小使が鳴らすと学年別に集合して朝礼となり、学年ごとに違う色の手ぬぐいを用いた。校長の話や注意事項のあと、簡単な体操をしてから学習に入った。休憩時間には木登り、ブランコ、かぶと虫探しなど、自由に遊んだ¹⁰⁰。

当時の林間学校の様子を撮影した写真が群馬県立図書館に所蔵されている。絵葉書形式のもので、4種それぞれにタイトルが付されている。一つは「開校式」の集合写真であり、大人が約30名、児童が百名ほど居並び、男性の大人は殆どが白いブレザーを着用している。次に「学科」として、林間に黒板を立てかけ、教師3名の指導の下に、机代わりに置かれた木箱の上で約25名の児童が筆記している様子の写真である。3番目は「体操」、最後は

「水遊」で、子供たちを舟に乗せ、大人が棹で操船している様子の写真である¹⁰¹。

開始後1週間の時点で、柳田一課長と不破医師が臨場して8月7日に調査したところ、全収容児童数118人の体重増加は、平均で、東校10匁、西校14匁、南校77匁、北校16匁であった。減少した者は40人で、増加した者は71人であったが、最も増えた児童は1週間で200匁増加した¹⁰²。

桐生市教育会の主催による第3回林間学校も渡良瀬錦櫻橋畔において、1925（大正14）年8月1日から開設された。その様子を撮影した6種の写真が同様に絵葉書形式で群馬県立図書館に所蔵されている。一つは「開校式」の集合写真で、大人が約25名、児童が40名ほど居並ぶ。次に「全景」として、川辺から林間を臨む風景が撮影されている。3番目は「遊び」で、ガウン姿の児童たちが遊戯をしている様子である。4番目は「童話」で、教師の語る話に耳を傾ける子供たちの姿が見られる。残り2枚は「午睡」で、傾斜の深い木椅子に布を張り、木陰でハンモック風に体を横たえる子供たちが写っている¹⁰³。

8月4日午前11時頃に現地を訪れた上毛新聞社記者は、赤・桃・青・白の学年別の布を頭上に巻いて、教師のオルガンに合わせて林間学校の歌を合唱し、続いて尋常小学1年生用の唱歌「雀の学校」を6年生まで一緒に歌った後、自由画の時間として蜜柑箱の机に向かってクレヨンを運ばせる様子を報じている¹⁰⁴。収容児童は第3回から第6回まで、各校35名ずつ合計で140名へと増員された。

桐生市の学務員会は1926（大正15）年7月15日に開会して第4回林間学校開設について協議したが、従来実施した渡良瀬河畔三つ塚の地は山林が伐採されたため林間学校としては適切でなくなったため、この年は、同じ渡良瀬河畔にある比較的平坦な川島原の山林に定めるとの計画が報じられた。経費は1千円（前年比212円増）で、各小学校の後援会からの600円、市教育会負担金400円でまかなった¹⁰⁵。同年は降雨がなく、児童の体重は前年に比して著しく増加した¹⁰⁶。期間全体の出席割合は94%を超えた¹⁰⁷。

桐生市教育会では、1千円の予算を組んで、1927（昭和2）年8月1日から21日までの3週間、第5回林間学校を市内錦櫻橋左側渡良瀬川畔に開設した。施設等は前年と変わらず、各校の後援会から自動車を出して児童の送迎を行い、各校から35名、合計140名の収容児童が毎日午前9時から午後4時までの日課を過ごした¹⁰⁸。ただし7日から14日までは雷雨があったため、児童は昼寝と水泳が十分できなかった¹⁰⁹。

1929（昭和4）年には新設された昭和尋常高等小学校が加わったため、第7回林間学校の収容児童総数は175名と増えた。第8回から第10回までは、各校割当が40人と増えたため、林間学校の収容児童総数は200名に達した。

桐生市の第9回林間学校は、1931（昭和6）年8月1日から3週間、市内5小学校か

ら175名の虚弱児童（各校35名）の収容を予定した。開設場所は、従来の錦櫻橋附近が護岸工事のため、同年度は水道水源地附近で開設することが、7月13日に開催された小学校長会議の結果、決定された¹¹⁰。実際には183名が参加し、閉会後に体格検査を実施したところ、157名は体重が増し、病気その他のために減少した者30名、増減がなかった者は2名であった。平均して109匁の増加で、なかには300匁も増加した児童がいた¹¹¹。

桐生市教育会主催で、1932（昭和7）年8月1日から20日まで、市内元宿町の水道水源地附近の渡良瀬河畔で開設中であった桐生市の第10回林間学校は、市内5小学校から200名の虚弱児童を収容した。8月18日に身体検査を行ったところ、参加児童の体重は平均で約200グラム増加し、見違えるように血色がよくなった¹¹²。

桐生市教育会が、例年通り市内元宿町の水道水源地附近の雑木林中に開設中であった第11回林間学校は、予定の21日間を終了し、関口市長、荻野助役、各小学校長列席のうえ、昭和8年8月21日に閉公式を挙行した¹¹³。この年から、境野尋常高等小学校が参加するようになったため、収容児童総数は220名に増えた。

1934（昭和9）年に桐生市内元宿町で開設された第12回林間学校は、その開校식을8月1日午前9時から挙行した¹¹⁴。収容した虚弱児童は199名、出席率97.64%で、身体検査の結果、期間中の体重増加は平均して87匁、最大増量427匁、減量した者1人（下痢のため）、増減なき者1人といった成績をもって8月21日に閉校式を渡良瀬河畔で挙行した¹¹⁵。

桐生市では、虚弱児童220名のため、1936（昭和11）年8月1日から21日まで、市内元宿町渡良瀬河畔の水道水源地において第14回林間学校を開設した。同日午前9時半から開校式が挙行され、関口市長をはじめ、倉林当番校長、太田校医、田島市会議長らが出席した。式では、来賓挨拶と注意、受持ち教師の紹介等に約30分が費やされ、この間、起立していた6年生男子児童2名が樹木の間から漏れる日光の直射にたまりかね脳貧血を起こして卒倒したので、教員らは2名を日陰に寝かせ、校医がカンフル注射をする等、騒ぎとなったが、幸い二人は意識が回復し早退して帰宅した¹¹⁶。

翌1937（昭和12）年には、桐生市と廣澤町との合併により広沢尋常高等小学校が参加したため、第15回林間学校の収容児童総数は240名となった。場所は例年同様、桐生市内元宿町地内にある渡良瀬河畔の雑木林であった¹¹⁷。この回を最後に、桐生市の各小学校連合形式による林間学校実施は終わった¹¹⁸。

大胡における実践

勢多郡大胡では、1925（大正14）年から大胡町小学校が林間学校を開設した。8月1日から3週間、同町の^{ちかど}近戸神社境内の緑陰で開設し、150名を収容した。日課は午前8

時集合、唱歌、お話、復習、体操、昼寝、水泳等で、日々牛乳5勺ずつ給与し、午後4時に帰宅させた。経費は250円かかったが、病弱児童の体質改善に効果があり、平均で107匁の体重増加をみた¹¹⁹。

藤岡における実践

多野郡の藤岡小学校では、暑中休暇を利用して児童の夏季聚落を1936（昭和11）年8月1日から12日まで開催し、虚弱児童および希望者550名を収容した。日課は、午前8時から児童検診、洗面、歯磨、体重測定、唱歌、童話、自由遊戯を行い、午前10時から自動車で約半里離れた神流川水泳場へ到り、正午まで水泳を楽しみ、午後12時半に帰校して講堂で栄養食の昼食をとった。午後1時から自動車で神流川水泳場に移動して再び水泳して、午後4時に帰校した。参加児童の食事の炊事には同校高等科二年の女生徒が当たり、監督指揮には高等科二年男子生徒が当たった¹²⁰。

渋川町における実践

渋川町では、字大崎水の公園内の松林で林間学校を設けるべきであるとの意見が町民の間に台頭したため、1933（昭和8）年8月11日、狩野町長、田部井小学校長、学務委員8名が高崎、前橋、伊勢崎、桐生など各地の林間学校を視察するため出張した¹²¹。

富岡町における実践

富岡小学校では、富岡高等女学校の下を貫流する鑛川の清流、長瀬の南岸に延々と茂るアカシア林の中央に会場を設けて、1940（昭和15）年7月28日から夏季聚落を開設し、尋常5、6年生の児童60名を収容した。午前中は学科、午後は遊戯、体操、水泳などが日課であった¹²²。

県北 草津町 孺恋村など

草津温泉では、1930（昭和5）年8月5日から8月30日まで、夏休みを利用して林間学校を開設した。町内の虚弱児童と浴客学童を対象とし、町と小学校が共催した。現在の小学校付近の丘に大きな天幕を張って児童を収容し、小学校教員が指導を担当した。この林間学校は昭和17年まで続けられた¹²³。草津では、1933（昭和8）年にも8月5日から8月20日まで、2500の浴客児童および町の子供のために、温泉地よりほど近い運動茶屋の勝地、松の木の中に小学校が林間学校を開催したことが報じられた¹²⁴。

この間、吾妻郡岩島では、仏教系修養団体「恒心會」が1931（昭和6）年8月18日から8月28日まで、曹洞宗の應永寺境内（現在の吾妻郡東吾妻町岩下）及び西方松林において林間学校を開設して、低学年児童を収容した¹²⁵。

日赤による休暇集落の事業数は、1930（昭和5）年に全国で35カ所、収容児童数399

5名に達していった¹²⁶。1933（昭和8）年には日本赤十字社群馬県支部が、吾妻郡嬭恋村の新鹿澤温泉において「高原学校」を開設した。県内小学校虚弱児童85名が、同年8月2日午前8時半から前橋駅前で身体検査を受け、嬭恋村に向けて午前10時半に出発した。訓導に引率され、看護婦（赤尾、海東、西村、丸田）と杉山医師の付き添いを受けた¹²⁷。午後1時50分、上田駅に到着し、上田温泉電車に乗り換え、終点の真田駅で下車し、5台の自動車に乗って鳥居峠を越えて、午後4時半に新鹿澤温泉に着いた。直ちに糖塚山に登り南に浅間山の噴煙を望み、下山して霊泉に浴して徒歩にて宿舎とした田代分校に到って夜を明かした。翌日は午前5時半起床、神宮・皇居遥拝、ラジオ体操、朝食のうえ、宿舎を出発し温泉に到り、高原に特設したバラック内において自習のうえ、昼食と午睡をとり、遊戯や体操などで高原の涼味とオゾンを満たし、午後4時より温泉浴、5時に出発して大型自動車で宿舎に帰り、夕食後はお伽噺、蓄音機、活動写真、学芸会などを催し、午後8時半に就寝という日課を規則的に繰り返した¹²⁸。宿は、茅葺屋根の小さな校舎の田代分教場を利用し、海拔2千尺の高地にある温泉附近のバラックに開設された高原学校で、勉強、運動、入浴、登山、夜は猿蟹合戦、日の丸茶屋での映画会といった日課の14日間を過ごして、8月15日に新鹿澤を出発した¹²⁹。

また桃井小学校では、1940（昭和15）年の夏、萩原進訓導が郷里である嬭恋村地内北軽井澤高原に林間学校を開設した。同訓導は、児童に鍛錬の夏を過ごさせようと、受持ちの6年生児童から「高原学校」の希望者を募集したところ30余名の応募者があり、引率して8月12日に前橋駅を出発した¹³⁰。1942（昭和17）年にも桃井国民学校では、7月26日から8月12日まで北軽井沢長野原第三分教場に「高原学校」を開設し、6年生の希望者のみ（前班男児74名、後班女児65名）を参加させた¹³¹。

この間、1941（昭和16）年には、県下の国民学校5、6年生の児童中、ツベルクリン反応の結果、結核菌陽性となった者のうち特に虚弱者百名を収容する夏期聚落を、暑中休暇を利用して吾妻郡新鹿澤温泉に開設した。これは群馬県結核予防会の初の試みとして実施され、参加者は2班に分けられ、2期（7月26日～8月6日/8月7日～18日）に収容された。期間中、県から村岡衛生技師以下の係官が出張し、医学的養護に努めた¹³²。

Ⅲ 前橋市の小学校における連合林間学校（昭和4年から12年まで）

前橋市内でも、桃井・敷島以外の久留万、中川、城南、城東の各小学校では附近に適当な緑陰がないため、夏季休暇中、休暇施設として自校を開放し、職員が交代で児童の面倒を見て、運動会やお伽会を催し、健康増進と情操教育を図っていた¹³³。それを、各校では「夏季教養所」と称して虚弱児童のために開設した。

この事情について、狩野校医は自著『学校衛生ニ関スル研究』（昭和3年10月）のなかで、以下のように述べている¹³⁴。

久留万、中川、城南、城東ノ四校ニ於テハ、地ノ関係上、林間「コロニー」開催スルヲ得ズ、為メニ学校内夏季教養所ヲ開催し、林間「コロニー」ト同様ノ教養ヲナシ、之レガ救済ニ務(ママ)メツヽアリ

例えば中川小学校では、1924（大正13）年の夏季教養所（希望制）の出席児童数は68名であった。翌年は児童100名を教師11人で対応した。日課は、水浴、湯浴、体操、遊戯、作業、給食、学習であった。ただし1926（大正15）年8月16日には、職員12名と学務委員の橋本国太郎の応援により、夏季教養所の児童が勢多郡南橋村田口（現在の前橋市田口町）の利根川水泳所に出かけるという、林間学校としての性格を多分に内包するプログラムを実施した¹³⁵。

前橋市では、林間学校を「私設的経営に任せず」「市立六校の斯うした不遇児」を全部収容し得る程度の林間学校を市営で設置したい、との市民の要望が昭和2年夏に興った。林間学校の効果を熟知していた中島視学ら関係者は、開設場所の調査に赴いた。敷島公園内の松林では狭隘に失して各校児童を収容することは困難であることを推知していた彼らは、勢多郡南橋村田口で下車して、阪東橋畔の大利根と廣桃堰引入れ口附近に広い松林を代替地として発見した¹³⁶。

前橋市内の全小学校の虚弱児童に自然の感化を与えたい、との均霑の要望・主張が翌年に高揚した結果、前橋市では1939（昭和4）年度から市内5小学校による連合林間学校が実現した¹³⁷。「地の利と学校の状況との関係により其の経営区々に涉り、同一市内の児童なるに関せず多少の幸不幸有之遺憾に存居候処、今回各小学校後援会の連合会組織せられたるを機とし、児童をして可成均等なる恩恵に浴せしめたい」との意向によって、新たな組織で実施・運営されるようになったのである¹³⁸。市費からの補助も、この年度から開始された¹³⁹。

ちなみに東京市では1922年度から林間学校の実施を希望する団体に対して補助金が支給されることとなり、1925年には約80団体がこれを受給している¹⁴⁰。

小田俊三は『野外学校の学理と実際』の中で、林間学校の組織について、4類型を示している。すなわち、1) 一校のみが単独で開催する場合、2) 数校が連合して開催する場合、3) 府縣市等の衛生部課が主催する場合、4) 特志の個人または集合団体が主催する場合の4種である¹⁴¹。これに照らして分類すれば、前橋市の林間学校については、昭和4年から、上記の2)と4)とを合わせた実施形態に移行したと言える。

第 1 回前橋林間学校

上記のように、前橋市では、市内の各小学校後援会が連合して林間学校を開催し虚弱児童を救済すべし、との議が成り、1929（昭和 4）年から市内 5 尋常小学校の連合林間学校の開催が実現した。市からの補助金 350 円、学齢児童保護会補助金 100 円、各小学校後援会の負担金 650 円、寄附金 67 円からなる収入によって、当該経費の 94.2%を賄うことができた¹⁴²。

前橋市内各小学校の夏季林間学校は、同年 8 月 1 日から 20 日間の予定で、勢多郡南橘村大字田口の広瀬桃木川保安林において開設が予定され、庶務会計及び設備係（石村猛、鈴木金吾、狩野壽平）、運搬及び間食係（斎藤隆平、牧辰雄）、児童係（秋山金次郎、狩野壽平）が分担して準備に取り掛かった。施設面では、午睡所、ブランコ 10 ヶ所、土俵 3 ヶ所を設け、驟雨を避けるため大天幕 3 張が用意された。開催地への往復は、東武電車を利用することとし、各校から職員が毎日 2 名ずつ出勤し、看護婦 2 名（1 名は赤十字社支部から特派予定）が付き添うこととなった。日課は、以下の通りである¹⁴³。

午前 9 時より 15 分間 朝礼、合同体操、深呼吸

午前 9 時 15 分から 10 時まで 学課復習

午前 10 時より 30 分間 休憩間食

午前 10 時 30 分から 45 分間 露天体操、皮膚摩擦

午前 11 時 15 分から 15 分間 休憩

午前 11 時 30 分から 30 分間 昼食休憩

午後 12 時から 1 時間半 午睡

午後 1 時 10 分から 15 分間 休憩

午後 1 時 45 分から 1 時間 水泳および砂遊び

午後 2 時 45 分から 30 分間 休憩間食

午後 3 時 15 分より 4 時までの間に田口電車停留所に至る

前橋市の児童には、前年までは学校の立地と経費の関係から、夏季林間学校に恵まれる者と恵まれざる者があったが、同年度から各小学校後援会聯合会の努力と前橋市当局の諒解とに基づき、各校が均一的に虚弱児を保護できる体制が整えられた。場所は、南橘村大字田口の廣瀬・桃木両堰普通組合の保安松林で、ここに各校から選ばれた 301 名が収容された。内訳は、桃井校 74 人、敷島校 70 人、中川校 57 人、城東校 50 人、城南校 50 人であった。電車での往路は、午前 8 時 25 分に岩神停留所を発車した。責任者の校長は、各交替で 1 名ずつ出校した。狩野校医は開所前検査を厳重に行うと同時に、貧血児が多数いるため腸内の寄生虫卵検査を実施した。露天体操には扁平足矯正の意味から矯正体操を加

え、また皮膚薄弱者が特に目立つので乾布摩擦を励行させることとした¹⁴⁴。昭和4年8月1日午前10時から、同所で開校式を挙行了¹⁴⁵。

なお前橋幼稚園（森島園長）では例年同様、同年7月25日から20日間、敷島公園の松林内において林間保育を実施すべく希望者を取りまとめつつあり、園児の移動は往復共に自動車を利用し、間食には幼児に適したものを選び、期間中に童話会や七夕祭などを行う準備をしている旨が報じられた¹⁴⁶。

第2回前橋林間学校

1930（昭和5）年8月1日から20日間（13日は休み）開校予定とされた前橋市の林間学校は、前年に開設した勢多郡南橘村を開設場所とすることを、費用の関係で取りやめにするのを内定した。替わって有力候補地とされたのが、岩神町の旧工兵バラック裏にある横地桂三郎氏所有の櫛林であった。水浴には不便があったが、ここに桃井、中川、敷島、城南、城東の児童から300名の栄養不良児を収容することとし、費用は前橋市と学齢児童保護会とで折半し、他は各校の後援会が負担することになった¹⁴⁷。

暴風雨のため、同年の林間学校は3日目の8月3日から開始された。旧バラック裏の観民山まで、桃井と敷島の両校児童は雨上がりの道を徒歩で通ったが、中川、城南、城東の低学年の児童は大型の自動車で現地へ運ばれ、参加児童300余名の身体検査後、林間学校が始められた¹⁴⁸。

午前9時から午後4時までのプログラムに参加した児童は、中川68、桃井70、敷島68、城南50、城東63の合計319人であった。養護には、毎日校長1名（4日交代）、職員各校2名ずつ（5日交代）、看護婦3名（うち1名は日本赤十字社群馬支部より派遣、他2名は交代勤務）があたり、校医は随時出張した。日課は、訓話、合同体操、深呼吸、学習、間食（牛乳）、遊戯、皮膚摩擦、昼食、午睡、水泳、砂遊び、間食、休憩、取片付であった。設備としては、天幕（6張）、物置（2）、便所（2）、湯沸所と水呑所（各1）、ブランコ（10）、モンドリ場（5）、帽子・学用品掛け（数ヶ所）等を設けた¹⁴⁹。

第3回前橋林間学校

栄養不良児の体質改善を目的として、前橋市では1931（昭和6）年8月1日から、岩神町観民山において市内各小学校連合の夏季林間学校を開設した。3週間の経費は、市で300円、各校の後援会で500円、合計800円を拠出し、300人を収容した。同年度の計画は、当番校である城南小学校の牧校長が担当した¹⁵⁰。

第4回前橋林間学校

前橋市小学校長会議が1932（昭和7）年7月5日午前9時から敷島小学校で開催され、

各校校長のほか、狩野市医、中元学務課長、本間書記などが出席し、同年度における夏季衛生施設に関して協議した結果、以下のように決定した。夏季林間学校は例年通り 8 月 1 日から 21 日まで岩神町工兵廠舎裏の櫓林において開設すること。草津町一井旅館経営の香草温泉において前年初めて夏季学園を開設して多大の効果を収めたことに鑑み、同年度も同様に虚弱児童 50 名のため夏季学園を開設して療養を加えること。さらに、中央放送局から、日本結核予防協会を通じて夏季結核予防施設費として 200 円の交付の申出があったので、これを資金として児童中に結核の素質ありと認める者 30 名程を診断し、林間学校と同じ場所で栄養食を摂らせて結核の発病を未然に防止することとなった¹⁵¹。

同年度の林間学校の経費は 1300 円が計上され、市内学齢児童保護会、市役所、教育会、各小学校後援联合会などが拠出した。なお 20 日間の期間中、8 月 13 日は御霊迎えのため、休校とされた¹⁵²。

当番校は城東小学校で、市内 5 校から 350 名の児童が選抜されたが、さらに日本放送協会からの寄附金 200 円により 30 名の体質虚弱児が加わった。8 月 1 日には、朝の点呼、狩野校医による健康診断の後、開所式が挙行され、齋藤義太郎・各校後援会聯合会長、堀助役、狩野校医、内川・城東小学校長の挨拶があった¹⁵³。

第 5 回前橋林間学校

1933（昭和 8）年 8 月 1 日午前 10 時から、岩神町の旧工兵バラック跡地の西北において、前橋市教育会の林間学校が開校された。来賓として学務委員も出席した開校式では、横川聯合後援会長の挨拶、狩野市医の衛生上の注意があった。久留万校を除く市内 5 小学校の身体虚弱児童 350 名を 8 月 21 日までの 3 週間収容し、毎日午前 8 時半から午後 3 時まで開設した（8 月 13 日は休み）¹⁵⁴。

前橋市立幼稚園（春山園長）では、同年 7 月 26 日から 8 月 12 日まで、敷島公園の松林内において第 11 回目の林間保育を実施した。同園では、虚弱児とは限らずに、大正 12 年から毎年実施していた¹⁵⁵。

第 6 回前橋林間学校

1934（昭和 9）年 8 月 1 日から開校された前橋市の林間学校は、前橋市岩神町工兵バラック跡北方の櫓林において同日午前 11 時より開校式が挙行され、江原市長、平田教育会長、玉木県衛生課長らが列席した¹⁵⁶。『昭和九年度 前橋市林間学校概要』（前橋市教育資料館蔵）によれば、参加児童は校医の身体検査により各校の栄養不良の児童を選抜し、保護者の申込により収容するものとし¹⁵⁷、予定定員は 350 名とした（各校配当人数は桃井 76、中川 63、敷島 101、城南 53、城東 57）。期日は 21 日までの 20 日間（13 日は休）とし、児童・職員の往復には大型自動車を利用した¹⁵⁸。職員体制は、各校より教員 2 名（合計 1

0名)が毎日勤務(連続5日間執務)、校長は各校交代で1名勤務(4日交代)とされ、黎明期に比較して校長・教員の負担が軽減された。看護婦は3名(うち1名は日本赤十字社群馬支部へ派遣依頼)が勤務した。備品・用具は各校から持ち寄った。

児童には、表に「前橋林間学校」、裏に所属校名・学年・組と氏名を記した「標識」を配布した。それは各校ごとに色別され、桃井は桃、中川は赤、敷島は紫、城南は青、城東は白とされた。学年別にみると、1年89名、2年105名、3年73名、4年54名、5年17名、6年12名と、低学年の参加者が多かった。

同年度は、戦前期最大の予算が組まれた。1344円17銭の収入の内訳は、市補助金350円、前橋市学齢児童保護会からの補助金100円、各後援会負担金500円、県の補助金300円、前年度繰越金94円17銭とされ、従来の学区内各町からの寄附金や有志寄附金の予定はない。支出内訳は間食費245円、副食費175円、自働車費300円、係員手当434円、設備費120円、薪炭費15円、借地料20円、運搬費5円、印刷費15円、雑費15円17銭と見込んだ。「昭和九年度 前橋市林間学校 会計決算書」によれば、収入は1402円22銭で、内訳は市よりの補助金350円、前橋市学齢児童保護会からの補助金100円、県よりの交付金300円、各小学校後援会負担金500円、有志寄附金43円、職員弁書代15円5銭、前年度繰越金94円17銭であった。実際の支出は1380円78銭で、内訳は間食費236円76銭、副食費179円46銭、自働車費300円、設備費104円67銭、薪炭費2円6銭、借地料20円、運搬費5円、印刷費16円87銭、宝探し代15円、雑費43円46銭、職員使丁手当457円50銭、差引残金21円44銭であった。

検査人員163名を対象とした健康効果としては、次のようなデータが列挙されている。身長が増加した者119名、増減なし44名。体重が増加した者120名、減少31名、増減なし12名。胸囲が増加した者107名、減少28名、増減なし28名。頸線肥大が有った者145名(治癒した者41名)、無かった者18名、皮膚の光沢、弾力共に向上した者135名。血色が良くなった者63名。静脈怒張があった者53名(全員治癒)。体温が37度以上あった者86名(37度以下になった者71名)、37度以下であった者80名。脈搏の異常があった者3名(全員平常に復す)¹⁵⁹。

第7回前橋林間学校

1935(昭和10)年度の前橋市内尋常小学校の虚弱児童対象の林間学校は、人絹会社の出現のため一時取止めの噂まで出たが、関係者の協議により水道水源地西北方の松林を使用して8月1日より開校することに決定し、当番校長には中畠・敷島小学校長が当たることとなった¹⁶⁰。前橋市内各小学校後援会联合会主催の小学校児童夏季林間学校の開会式が、群馬県水産試験場南方の松林において、8月1日午前10時より、江原市長、久保田後援会

聯合会長らの出席のうえ、児童 350 名が参集して行われた¹⁶¹。前橋市内の学童を収容して市外の敷島公園内の北部の松林で児童養護のため開催された林間学校は、8 月 21 日午後 1 時半より関係者参列の上、閉校式を挙行した¹⁶²。

設備用品は各校が分担して持ち寄った（それぞれ校名を明記もしくは烙印を附した）。学校別の参加人数は、桃井 68、中川 70、敷島 68、城南 53、城東 53、若宮 38 であった。参加児童には「標識」を庶務係が配布し、その木札の表には「前橋林間学校」、裏には各児童の氏名、所属学校名、学年、組を記させた。第 6 回同様に色別となっており、同年に新設された若宮尋常小学校は黄色であった。往復には自動車を用いた。20 日間の開催中、職員は各校 2 名ずつ（ただし城東と若宮は 1 名）5 日連続出勤し、計 10 人で養護に当たった。校長は 1 名が各校交代で出勤し、校医は随時出勤した。看護婦は 1 名が毎日交代で執務し、使丁は 3 名（各校交代）、栄養係 3 名（各校交代）、栄養係使丁 1 名も出勤し、合計 20 人で組織編成した¹⁶³。なお「桃井小学校林間学校のうた」（上級用）が同校教頭の本間勉によって作詞されている¹⁶⁴。

ちなみに開催を前にした同年 5 月、校医の狩野壽平は講演会において他の医師 2 名と共に講演し、「学校衛生上の養護施設に就て」というタイトルの下に「前橋林間コロニー」の概要を報告している¹⁶⁵。

第 8 回前橋林間学校

1936（昭和 11）年度もまた、市内の尋常小学校 6 校の児童の中から校医の身体検査によって選定した栄養不良者について保護者の申込により 350 名を収容した¹⁶⁶。開催地は敷島公園北部の松林で、8 月 1 日から 21 日まで（13 日は休）の 20 日間開催した。職員の勤務体制や参加児童への「標識」配布は前年を踏襲した。各種用具は各校が分担して持ち寄る仕組みも同様であった。当番校は城南小学校であった¹⁶⁷。

予算は 1100 円を組んだ。市補助金は 350 円と変わらなかったが、学齢児童保護会の補助金は 70 円と減額された¹⁶⁸。結果的には、市補助金 350 円、学齢児童保護会の補助金 100 円、各尋常小学校後援会負担金 633 円、前年度繰越金 30 円 39 銭の収入が得られた。開催目的は「虚弱児童ノ養護並ニ健康ノ増進ヲ図リ併セテ其精神ヲ爽快ニ発暢セシムル」と謳われ、桃井 70、中川 73、敷島 62、城南 52、城東 54、若宮 37 の児童が参加し、平均出席率は 93.43% であった。「副食物献立表」が作成され、野菜の煮付、がんもどきの煮付、鉄火みそと煮物、小倉煮と照り鰯、山海珍、衛生煮が提供された。健康効果については男女別に統計がとられた¹⁶⁹。

第 9 回前橋林間学校

前橋市では、1937（昭和 12）年度から久留万小学校を加えて、全市 7 小学校が一団と

なって虚弱児童の救済に努めるに至った。桃井・中川・敷島・城南・城東・若宮・久留万の各小学校から350人の児童が参加した同年度の林間学校の経費1238円の94.2%は、市補助金450円、各校負担金650円、寄附金67円、繰越金51円で賄われた。場所は敷島公園北部の松林であったが、期間は7月21日から8月9日までと早められた。

この間における前橋市からの補助金額の推移を、「前橋市歳入歳出予算 決算書」（前橋市議会事務局蔵）を紐解いて確認してみると、昭和7年度300円、8年度200円、9年度から11年度までが350円である。

IV 栄養補給の強化策

内務省では、1920（大正9）年に国立栄養研究所が設置され、1927（昭和2）年には栄養技手が誕生した¹⁷⁰。1929年の警察部長・衛生課長会議で、安達内務大臣名を以て「国民栄養改善に関する件」が指示事項として挙げられ、栄養士が各地方庁に置かれる端緒となった。さらに、一般民衆に対する栄養啓蒙教育も全国的に実施されるようになった¹⁷¹。

文部省の1930（昭和5）年の調査によれば、全国の小学生およそ1千万人のうち10%に当たる百万人が虚弱児童であるとされた¹⁷²。同年度に開設された林間聚落は、群馬県において10ヶ所あったが、これは福岡の14、岐阜の11に次ぐ、全国第3位であった¹⁷³。

翌1931年9月18日の柳条湖事件の勃発を皮切りに始まった満州事変以後、健兵健民政策が要請されるに及び、国民の体力増強が国家的な課題となり、栄養面での積極的な指導行政の重要性が増していった。文部省学校衛生官であった大西永次郎の監修した『施設中心 虚弱児童の養護』が刊行されたのは、同年11月20日であった。この編著に「虚弱児童と栄養」を寄稿した栄養研究所技師の原徹一（医学博士）は、虚弱児童の養護には栄養改善が最も肝要であると主張した¹⁷⁴。

群馬県の林間学校では、その黎明期においても栄養補給には十分な経費を投じて、参加児童に副食を提供したが、1933（昭和8）からは県の衛生課が介入指導に当たり、体質改善に必須と言われた栄養食の改善を重視するに至った。県当局では本省から栄養技師を招聘して栄養食を実施することとし、前橋、高崎、桐生の3市小学校の林間学校および日赤群馬県支部が吾妻郡鹿澤に開設した林間学校の児童705名を対象に栄養改善食が提供されることとなった¹⁷⁵。

日赤群馬県支部が、吾妻郡嬭恋村田代分校に昭和8年8月2日から15日まで「高原学校」を開設して、県内の虚弱児童男女90名を収容する計画が報じられた。同年は特に群馬県自慢の栄養料理を給与して、大いに成績を挙げようと工夫された。7月30日午前10時からの打合せには、九鬼内務部長、星野学務部長、富塚主事、黒岩嬭恋校長、栗原高崎東

校訓導、加藤女子師範学校訓導、瀧澤田代分校長、飯塚高崎中央校訓導および看護婦が参集する予定とされた¹⁷⁶。

桐生市では、すでに第10回林間学校（昭和7年）の際、東京の栄養研究所から2名の栄養士を招聘した¹⁷⁷。翌年8月1日から21日まで市内元宿町の水道水源地附近の渡良瀬河畔にある雑木林中において開設された桐生市教育会の夏期林間学校も、栄養給食に特に力を入れ、東京栄養研究所より専門の栄養技師を迎えた。収容人数は、東・西・南・北および昭和の各校から40名、境野校から20名、計220名であった¹⁷⁸。

前橋市の夏季林間学校は、1934（昭和9）年8月1日から21日まで、岩神町工兵廠舎跡のバラック附近の雑木林に開設し、市内の尋常小学校の虚弱児童350名を収容して健康増進を図る目的で、経費1500円を計上した。同年は県からは山田技手が出張して栄養給食の指導を為すこととなり、県衛生課の山田栄養技手献立の栄養食を支給する計画であった¹⁷⁹。同年7月下旬、内務省衛生局から出張した栄養技師が、山田県栄養技師と共に栄養食に供する昼食1週間の献立について打ち合わせを行う予定が報じられた¹⁸⁰。『昭和九年度 前橋市林間学校概要』によれば、栄養士1名が毎日勤務したほか、栄養士補助員3名がついた。ご飯はかなり多い量を児童に携帯させ、副食物は林間学校内に栄養食調理所を設け、県衛生課の調整になる夏季聚落献立表により栄養士の手になる栄養価の高い物を調理して与えたほか、毎日午後に比較的栄養価の大にして児童の嗜好に適し消化しやすい物を選定して間食として菓子を給与した。ただし同年は経費の都合で牛乳を提供することができなかった¹⁸¹。

同年8月1日から21日まで、前橋、高崎、桐生の3市および水上村の4ヶ所に開設された林間学校の児童に対して、群馬県衛生課の発案で、栄養食が給与されることとなった。開設中、東京栄養研究所の生徒4名が応援に入り、児童新聞を発刊し、栄養の歌のリーフレットを配布することで、栄養改善と健康増進の徹底を期することとなった¹⁸²。

昭和9年度に、前橋のほか高崎、桐生、利根郡水上の4ヶ所に開設された林間学校（350名の児童を収容）の成績は良好で、群馬県衛生課栄養係の調査によれば、体重増加分は平均で、高崎が650グラム、桐生と前橋が共に500グラム（調査中）と報告された¹⁸³。利根郡水上の林間学校とは、日赤群馬支部が水上小学校に設けた夏季児童保養所のことである¹⁸⁴。

1935（昭和10）年8月1日から桐生市元宿町渡良瀬河畔に開設された林間学校では、虚弱児童に栄養食を支給した。これは栄養食研究所員の菊地つや子女史の調整によるもので、支給後9日間で顔色・動作等に効果をあらわし、「非常な好績をおさめつゝある」と報じられた¹⁸⁵。

桐生市では翌年も東京栄養研究所へ栄養士の派遣を依頼していたところ、林みゆき栄養士が7月31日に来桐して、林間学校で配給する栄養食の準備に着手した¹⁸⁶。渡良瀬河畔において開催された桐生市林間学校の閉校式は8月21日午後2時から挙行された¹⁸⁷。

1937（昭和12）年度、群馬県下の小学校では恒例の林間学校を開設して虚弱児童の体位向上を図ることとなったが、県衛生課では特に同年度から栄養方面にも「力瘤を入れ」、新鮮な空気、適当な運動に加え、「栄養満点の三拍子を揃えて進む事になり」、下記林間学校に対して栄養技手を派遣して指導に当たることとなった¹⁸⁸。

前橋市教育会主催林間学校（7月21日～8月9日）敷島公園、350名、栄養副食（1食分3銭）

伊勢崎教育会主催林間学校（7月21日～8月10日）華蔵寺公園、135名、栄養昼食（1人10銭）

高崎市東校林間学校（7月21日～8月10日）少林山、60名、栄養昼食

高崎市中央校林間学校（7月21日～8月3日）少林山、50名、栄養昼食（1人7銭）

日赤支部主催臨海学校（7月26日～8月15日）神奈川県鵜沼小学校（高津スミ女史出張）

桐生市教育会主催林間学校（8月1日～21日）同市水道水源地附近、240名、栄養昼食（1人6銭）

桐生市では、桐生市教育会の評議員会が1937（昭和12）年7月10日に市役所で開催され、林間学校の件を附議した。同年は8月1日から21日まで、渡良瀬河畔（水道水源地）に開設することとされた。虚弱児童に提供される栄養食は、オムレツ、五目飯、かき揚げ、トマトライス、豆腐料理、おろし煮、コロケ等で、間食としては西瓜、夏ミカン、ドロップなどであった¹⁸⁹。

1937年夏、国民体位向上は跛行的であってはならぬとされ、暑中休暇を利用して県下各地の林間学校に「第二国民」の体力補強工作が開始された。前橋市では、小学校連合後援会が主唱して、市からの補助金350円に加えて、その3倍の寄付金を募り、これを活用して350名の虚弱児童を鍛錬すべく、同年7月21日に開会式を挙行した。場所は、松風涼しく、清冷な水にも恵まれた敷島公園の東北隅で、理想的な栄養補給と、運動で楽しめながら健康増進を図る趣旨であった。しかし監督の任に当たった訓導によれば、欠食児童で林間学校に参加した児童は僅かに4名のみで、かえって中流もしくはそれ以上の家庭で過保護・溺愛されている児童が多いという皮肉な実態があった¹⁹⁰。

V 前橋市の「夏季学校」と桐生市の「夏季学園」（昭和13年から19年まで）

前橋市立尋常小学校による林間学校開設に功績のあった狩野壽平が「老年と衰弱の故を以て」、1938（昭和13）年3月限りで前橋市小学校専任学校医を辞し、久留万高等小学校のみ嘱託を受け、前橋市教育会所属の児童相談所の主任となった¹⁹¹。群馬県の林間学校のパイオニアの学校衛生界からの実質的な退場であった。

同年1月11日、内務省の外局であった衛生・社会両局が厚生省として分離され、独立した。

前年に勃発した日中戦争のために始まった生産・消費物資の統制は、ガソリンの消費統制に及び、石油類は同年5月より配給切符制となった。この国策に従い、小学校では林間学校開催期間中、参加児童送迎のため自動車を使用することができなくなった。

経費節約のため、各小学校は校内において同種の催しを行うこととされたが、林間学校の名称は「夏季学校」と改めることを余儀なくされた。こうして各校独自に夏季学校が開催されたが、そこでの重点は「栄養の給与並に生活訓練」に置かれた。各校には午睡所、食事所、洗面所、水遊び所が設けられ、久留万校には炊事所が置かれて各校に配布する副食の調理に当たった。日課は、朝礼、体操、復習、散歩、乾布摩擦、お話、昼食、午睡、砂・水遊び、間食と、林間学校時代と大差がなかった¹⁹²。

前橋市では、そうした変更理由を「本年ハ戦時体制下ノカツ統制ノ国策ニ副フベク且ツ組費ヲ節約ノタメ各校々内ニ於テ開催セリ」と説明している。収容児童数は計350名（各校配当人数は桃井70、中川63、敷島56、城東60、若宮37、久留万12）で、期間は7月21日から8月9日までの20日間であった。虚弱児童の養護にあたる職員については、各校から教員3名（ただし若宮校は2名）毎日勤務（計17名）、校長1名（各校交替）、校医2名（各校交替）、看護婦3名（1人2校担当）、栄養係各校より3名、使丁各校から2名、合計28名体制で臨んだ¹⁹³。

桐生市においても同様に1938年から連合林間学校を取りやめ、学校ごとに独自に、自校あるいは渡良瀬河畔や神社等の林間を利用して開催するようになった。ただし参加児童総数は前年の240名から1050名に激増し、同時に名称を「夏季学園」と改称した¹⁹⁴。開設場所については、東小・南小・北小は講堂を主にして教室も使い、西小は「学校を本拠とするも特に移動聚落的方法」をとり、昭和の小は渡良瀬河畔に天幕5張を張り、境野小は学校近くの天神の森で、広沢小は渡良瀬河畔の松林で開催する、と学校の置かれた地理的条件に従って様々であった。期間は8月1日から20日まで、参加児童は、ほとんどの学校で150名程度であった。境野小学校では、婦人会、女子青年団、高等科女児が組織的に支援し、炊事を担当したほか、町内有志や学校後援会員の協力もあった。日課は林間学校当時と同様である。境野小と広沢小を除く市内5校については、間食を含めて副食の献立は、西小学校の栄養副食物調理部が担当し、同校の調理室で調理したものを5校に配給した¹⁹⁵。桐生市夏季学園は、千余名もの児童を収容して同月20日午後1時に終了式を挙行した¹⁹⁶。

前橋市では翌1939（昭和14）年も、ガソリン節約の趣旨から児童輸送用にバスが使用

できないため、各校ごとに7月26日から夏季学校を開校した。前橋市立小学校の虚弱児童350名に施行してきた夏季学校の閉校式が8月12日午後2時から桃井小学校において挙行され、身長体重の増加をみて発育成績良好と報じられた¹⁹⁷。1940（昭和15）年8月11日には、午後2時から前橋市内7小学校が参加した夏季学校の閉校式が中川小学校において挙行された¹⁹⁸。

1941（昭和16）年3月に発せられた国民学校令により、小学校が「国民学校」と名称変更された後も、児童の養護は重要視された。同年の夏休み中の養護施設に関する対策講究を進めていた県下の各学校に対し、群馬県学務課は通牒を発し、最善を尽くすよう指導した。当該通牒は、以下に明示された本省の方針に依拠するものであった¹⁹⁹。

- 1、施設場所は教育上衛生上適當の地域を選定すること。
- 2、施設時期は七月及八月上旬を選び期間は二週間以上とすること。
- 3、職員は教員、医師、看護婦を以て組織し教員数は児童二十名に対し一名以上とする。
- 4、参加児童の選定は特に身体検査を実施し参加の適否判定に萬遺憾なきを期す。
- 5、日課行事は特に児童の心身の状況を考慮して之を為し適當なる栄養と休養を與へ過勞に陥らざる様留意し健康生活の実践をはかる。

1941年8月1日午前9時から、前橋市内7国民学校が参加する夏季学校の開校式が敷島国民学校において挙行され²⁰⁰、同校において同年8月18日午後2時から夏季学校の閉校式が挙行された²⁰¹。

同年11月6日に群馬県の林間学校のパイオニア狩野壽平が死去（享年66）²⁰²すると、同月10日に前橋市立久留万国民学校高等科において前橋市合同国民学校葬が挙行された。「慈濟院徳峰道壽居士」とされた狩野は、源英寺（前橋市大手町3丁目17番地22）の墓地の一角にある「狩野家之墓」（昭和18年に建立）に眠っている。この曹洞宗の寺院は、偶然ながら、かつて林間学校へ向かうため桃井尋常小学校児童が朝集合した神明幼稚園のあった場所から至近距離にある。

翌1942（昭和17）年、前橋市内国民学校は7月26日から8月25日までの長期授業休止期間中、皇国民鍊成の立場から、城南国民学校を当番校として、市教育会の費用負担により、虚弱児童350名を収容する夏季学校を開設することとなった²⁰³。前橋市立各国民学校後援会連合会が主催する夏季学校の開校式は、同年7月26日午前10時から当番校の城南国民学校で挙行され、合計350名の児童が出席した。市からは新井助役、田中教務課長、大島市会議長、市議、各国民学校長、岩佐後援会連合会長らが列席し、国民儀礼についての会長式辞、市長の代理告示、来賓祝辞、関口校医の注意などがあった。式後、児童は自校に帰り、訓話、ラジオ体操、休憩、講習、散歩、皮膚乾布摩擦、お話、自由運動、

唱歌、遊戯、昼食、午睡、散歩、砂遊び、体操、入浴といった日課を過ごすなかで「立派な體が鍊成される」ことが期待された²⁰⁴。

同年度の夏季学校は、収支 1181 円 48 銭の予算を組んだ。収入内訳は市補助金 500 円、各校後援会負担金 525 円、学齡児童保護会補助金 150 円、前年度繰越金 5 円 48 銭、雑収入 1 円。支出内訳は事務費 35 円、設備費 60 円、副食費 504 円、薪炭費 15 円、栄養剤 7 5 円 60 銭、米 2 円、係員手当 306 円、雑費 120 円、予備費 63 円 88 銭であった。「虚弱児童ノ健康ノ保持増進ヲ図ル」ことを目的として²⁰⁵開催された前橋夏季学校の閉校式は、同年 8 月 7 日午後 2 時から各校ごとに挙行された²⁰⁶。

なお桃井国民学校では、これとは別に、虚弱児童に準ずる児童 120 名のための「養護学級」を、保護者の経費負担により 8 月 1 日から 20 日まで開設した。桃井校の夏季学校割当数は 72 名であったが、同校には「養護ヲ要スル児童」が 200 名いると判断したため、これとは別に収容人員 128 名の「夏季養護学級」を保護者に募集した。夏季学校の経費は不要であったが、養護学級は 3 円を徴収した²⁰⁷。

この措置は、「国民学校ニ於テハ身体虚弱、精神薄弱其ノ他心身ニ異常アル児童ニシテ特別養護ノ必要アリト認ムルモノノ為ニ特別ニ学級又ハ学校ヲ編制スルコトヲ得」とし、さらに「前項ノ学級又ハ学校ヲ編制ニ関スル規定ハ別ニ之ヲ定ム」とした国民学校令施行規則第 53 条に基づくものであった。これを受け、昭和 16 年 5 月 8 日文部省令第 55 号として「国民学校令施行規則第 53 条ノ規定ニ依ル学級又ハ学校ヲ編制ニ関スル規程」が公布された。この第 1 条に「本令ニ於テ養護学級又ハ養護学校ト称スルハ国民学校令施行規則第 53 条ノ規定ニ依リ編制セルモノヲ謂フ」とある。以後、養護学級はこの規則に準拠することとなった²⁰⁸。昭和 17 年度、全国には 1,616 の養護学級があり、合計 64,891 名の児童を収容していた²⁰⁹。

1943（昭和 18）年度も、前橋市内の各国民学校の夏季学校が市立各国民学校連合後援会主催で開催され、その開校式が 7 月 26 日午前 9 時から城東国民学校において挙行され、引き続き各国民学校ごとに 8 月 10 日まで虚弱児童を収容して開設されることとなった²¹⁰。

前橋では、毎年、市立の各国民学校連合後援会主催で、各国民学校初等科の虚弱児童のために夏季学校を開設してきたが、1944（昭和 19）年は設備等の関係から、学校ごとに自校内で開設し、栄養給食、体力錬成など意義ある行事を行う方向で準備を進め、7 月 21 日午後 2 時に関係者が若宮国民学校に集まり、開校式を行うこととなった。開設期間は 14 日間で、収容児童数は合計で 350 名であった²¹¹。前橋市内の各国民学校（久留万国民学校は除く）では、同年 7 月 21 日から 8 月 3 日まで、夏季学校が校内に開設された。午前 8 時から午後 3 時まで、一般授業、午睡、水遊び、散歩、体操、音楽といった日課を過

した児童らには、手製の栄養食が提供された。なお、桃井国民学校の林間学校担当は養護学級担任の荒木サダであった²¹²。

このように、1938（昭和13）年から開始された前橋市の「夏季学校」は、1944（昭和19）年の夏までの7年間、虚弱児童の体質向上のため継続された²¹³。桐生の夏季学園は、それより以前の1941（昭和16）年に、その歴史を閉じた²¹⁴。

前橋市の夏季学校は太平洋戦争下においても継続されたが、1945（昭和20）年に至ると戦局が緊迫し、度重なる米軍機の空襲により7月11日からは授業停止という状態に陥り、1921（大正10）年以来の伝統を有する群馬県の虚弱児童向け夏季養護施設は、ここに休止のやむなきに至った²¹⁵。

夏季学校に対する前橋市からの補助金額の推移を、「前橋市歳入歳出予算 決算書」（前橋市議会事務局蔵）を紐解いて確認してみると、14年度から16年度までが500円、18年度は各国民学校に対して500円であるが、19年度は記載がない。

まとめ

大正後期から昭和戦前期にかけて、群馬県の各地に、虚弱児童のための夏季学校衛生施設として、林間学校が開設された。これには、前橋や桐生のように幾つかの小学校が連合して開催したものと、個別の小学校による開催があった。そのほとんどは、虚弱児童を対象とした。

前橋では当初、桃井尋常小学校と敷島尋常小学校の2校による合同開催であったが、市内小学校間の機会平等化要求から1929（昭和4）年より前橋市内の尋常小学校5校による連合林間学校に発展し、市費の補助も受けるようになった。事業経費の額から観ると、昭和9年度がピークで、予算・決算額ともに1400円を超えた。当初、属人的リーダーシップに支えられた前橋の林間学校実践は、参加校の増加に伴い、システム化されたとみてよい。

群馬県の林間学校には、小学校後援会連合会主催のほか、伊勢崎のように町の教育会、あるいは日本赤十字社群馬県支部、群馬県結核予防会、修養団体といった種々の実施主体が存在し、とくに昭和期に入って多様化した。町と小学校との共催という例もあった。高等小学校児童をも参加させた伊勢崎市教育会の林間学校や高崎盲学校の林間学校といった例外はあるものの、ほとんどは尋常小学校の児童を収容した。寺院において林間学校を開催した学校も幾つかあったが、いずれも禅寺もしくは天台宗の寺の境内であった。

前橋市では、1921（大正10）年から1937（昭和12）年まで、開催場所が敷島公園、岩神町観民山、南橋村田口と変遷したものの、市立の尋常小学校による林間学校が開設さ

れ続けた。そうした機運に刺激を受け、前橋市では市立幼稚園の林間保育も敷島公園で実施された。参加児童のために、有志による娯楽的な行事が工夫され、プログラムに組み込まれることがあった。篤志家による寄付金や物品供与もあり、協力的な市民に支えられた事業であった。

群馬県の林間学校は、当初から療育的発想に基づく教育実践であり、間食に配慮がなされたが、1932年頃より栄養学的観点から栄養補給に重点が置かれるようになった。林間学校で児童が口に入れる物に、内務省衛生課や県衛生課の指導が入るに至り、栄養食の改善が試みられた。林間学校という教育領域に内務行政が介入・協力したものと評しえよう。

前橋林間学校の連合開催を可能にしたのは、大型自動車の存在であった。しかし1938年からは、ガソリン消費の統制から児童送迎用の大型バスの使用が認められなくなったため、郊外での開設は取りやめられた。児童を林間に引率できないため、実質的な意味での「林間」学校は終焉を迎えたものの、その趣意は「夏季学校」に引き継がれた。必ずしも緑蔭の下で開設できなかったが、各小学校の構内で同様な養護実践が実施され、これが太平洋戦争下まで継続して実施された。なお桃井小学校が夏季学校を補完するため1942年から「養護学級」を開始したことは注目に値する。

群馬県内の主要都市以外に、草津、嬬恋、北軽井沢、吾妻郡、水上などの県北でも林間学校が開設されたことは、従来指摘されてこなかった史実であり、今回の調査で明らかにできた。

群馬県下における林間学校実践は、そのほとんどが小学校による通所型（非宿泊型・日帰り）の林間学校であったが、1933年に日本赤十字社群馬県支部が吾妻郡嬬恋村田代分校に開設した「高原学校」や、桃井小学校が1940年及び1942年夏に嬬恋村地内北軽井沢高原に開設した「高原学校」、1941年に群馬県結核予防会が吾妻郡新鹿澤温泉に開設した夏期聚落などは、宿泊型の林間学校（いわゆる全聚落）であった。

当時は、虚弱児童の健康増進のメルクマールが、身長・体重・胸囲の増減にあると認識され、前橋市の小学校などでは詳細な統計表が作成された。その後、チェック項目として皮膚の光沢や頸腺肥大の有無などが加えられたが、医化学的な物質代謝機能の検査や血清学的免疫産生の検査までは行われなかった。

国民学校令の公布後、「夏季学校」における健康増進の取組は「錬成」概念に包摂されて語られるに至った。

註

¹ 大西は、岡山医学専門学校卒業後に各県の学校衛生技師を歴任した後、1924年に文部省学校衛生官となった。この間、1921年から雑誌『学校衛生』の、1928年からは雑誌『養護』の編集の任に当たり、1936年末から

財団法人「帝国学校衛生会」常務理事に就任した。戦後は岡山市衛生科学研究所長、岡山市議会議員。大西の経歴については次の書から教示を得た。瀧澤利行・七木田文彦編『雑誌「養護」の時代と世界 学校の中で学校看護婦はどう生きたか』大空社、2015年、53-54頁および70頁。

- ² 前橋市立桃井小学校編『桃井校百年のあゆみ』前橋市立桃井小学校、昭和48年、58-59頁。
- ³ 前橋市史編さん委員会編『前橋市史』前橋市、第4巻（近代・現代編）、1979年、480頁。
- ⁴ 大西永次郎「夏季に於ける児童の田園滞在」『教育時論』1483号、開発社、1926年、2頁。
- ⁵ 大西永次郎監修『施設中心 虚弱児童の養護』右文館、昭和6年、11-12頁。なお大西は群馬県に奉職中、同県下の小学児童約10万余人に対して体格薄弱の原因に関する統計調査を試み、約30%においてその主要原因が遺伝的關係に存することを見出した。同書、7頁。
- ⁶ 「保護を要する 五十万の虚弱児 文部省で基礎案を作て 救済策の参考に供する」、『上毛新聞』大正13年8月19日（火）、第12001号、第3面。
- ⁷ 小田俊三『野外学校の学理と実際』弘道館、1922年、18頁。
- ⁸ 効果が認められたことから、同市では250ヶ所に増設し、最初は3ヶ月であった開設期間も6ヶ月に、次に8ヶ月とし、ついには1年中開くこととなり、全ドイツに林間学校が広がった。同上書、39-40頁。日本国内の事例としては、大正10年夏期1か月間開設された兵庫県結核予防会主催の兵庫県武庫郡六甲山上での六甲高山学校（京大医学士・澤野哲三主宰）などが紹介されている。
- ⁹ 同上書、75頁。同書では、一時的野外学校を、止宿式と通学式に類別している。
- ¹⁰ 同上書、219頁。
- ¹¹ 亀島晟・石原正明『日本に於ける常設林間学校之実際』新進堂、大正13年、91,98頁。
- ¹² 同上書、109頁。
- ¹³ 『自然と児童の教養』は、その製本が九分通り出来上がった刹那に関東大震災に遭遇して全てが無に帰したが、幸い校正刷が留岡の手元に残っていたため、大正13年に再び上梓することができた。なお彼は第一章の冒頭で「私は長い間、何故に我国教育家の多数が、又教育行政の當局者が、教育の上に偉大なる影響を與ふる處の自然 Nature、の勢力に關し、之を認むることの如何に浅いかといふことを疑問として居たのである」とも書いている。
- ¹⁴ 同上書、155-156頁。留岡がバキンスキーと記して言及した Adolf Baginsky によって、ドイツで最初の『学校衛生ハンドブック (Handbuch der Schulhygiene)』が出版された（初版1877年、改訂版1882年、1900年）。梅原秀元「健康な子どもと健康な学校—19世紀から20世紀初頭におけるドイツの学校衛生の歴史研究をめぐる一」『三田学会雑誌』慶應義塾経済学会、108巻1号、2015年4月、77頁。
- ¹⁵ 日本学校保健会編（文部省監修）『学校保健百年史』第一法規、昭和48年、211頁。
- ¹⁶ 東京帝国大学総長を務めた理学博士・山川健次郎の四男。文部省体育局長を務めた。会津藩家老として会津戦争では官軍に重囲された会津若松城に入場するため、会津地方の伝統芸能・彼岸獅子を先頭で舞わせながら入場するという武勇談を残し、後に陸軍大佐・東京高等師範学校および女子高等師範学校の校長を務めた貴族院議員・山川浩男爵を伯父とし、男爵家を継いだ人物である。
- ¹⁷ 同上書、資料編（年表）、17-20頁。
- ¹⁸ 佐鳥俊一編『群馬県百科事典』上毛新聞社、1979年、963頁。
- ¹⁹ 和田は前年に赤城山大沼湖畔でキャンプ・アカギと称する計画を進めたが、費用の不足により実現できなかった、と述べている。「夏季に於ける子供は 林間学校で 修養させれば心身とも発達す」、『上毛新聞』大正12年7月6日（金）、第11606号、第4面。
- ²⁰ 鵜飼盈治『日本アルプスと林間学校』同文館、大正12年、序、6頁。著者は同校の山岳部代表であった。長

野県の中房温泉で実施された第 1 回目の林間学校には澤柳校長も同行した。

- ²¹ 佐々木高史『写真アルバム 前橋市の昭和』いき出版、2012 年、45 頁。ちなみに、「神明幼稚園」と呼称されるもとなつた至近距離にある神明宮は、伊勢神宮の分霊をまつる神社である。
- ²² 「林間保育 市立幼稚園で 小出河原の 松林内に開設されん 十一日の父兄會で確定」、『上毛新聞』大正 12 年 7 月 11 日（水）、第 11611 号、第 5 面。
- ²³ 費用は合計で 6 円 98 銭と試算された。「林間保育始る 市幼稚園企劃」、『上毛新聞』大正 12 年 7 月 22 日（日）、第 11622 号、第 5 面。
- ²⁴ 「大利根の清流を背景に 大自然の懷に 抱かれ嬉々として遊ぶ 幼稚園児も仲間入りして 市の林間學校始まる」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 2 日（木）、第 11632 号、第 2 面。
- ²⁵ 「林間學校視察 豊島視學官が」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 5 日（日）、第 11635 号、第 5 面。
- ²⁶ 「開設一週間を経た 林間學校成績 児童は皆見違へる程 丈夫相になって来た」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 9 日（木）、第 11139 号、第 5 面。
- ²⁷ 「林間お伽講演 昨日小出河原」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 13 日（月）、第 11642 号、第 2 面。
- ²⁸ 「林間學校 好成績に終る」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 22 日（水）、第 11652 号、第 2 面。鈴木校長の在職期間は、大正 11 年 12 月～昭和 4 年 9 月。『敷島小学校開校 130 周年記念誌』前橋市立敷島小学校、平成 14 年、10 頁。
- ²⁹ 学区内住居別児童数は、多い順に列挙すると、立川町 15 人、紅雲町 14 人、神明町・紺屋町・南曲輪町それぞれ 13 人、堅町 12 人、連雀町 11 人、北曲輪町 10 人、曲輪町 9 人である（以下略）。
- ³⁰ 学年ごとに若干異なるが、第 1 学年の「時間配当表」を以下に示す。午前 8—9 途上、9—10 診断・深呼吸・訓話、10—10:30 間食（牛乳）、10:30—11:30 唱歌・遊戯、11:30—12:00 昼食、12:00—0:30 林間散歩、0:30—1:30 水遊、1:30—3:00 午睡、3:00—4:00 間食・自由遊戯。
- ³¹ 設備費の内訳は、物置舎・午睡場等 94.42 円、ハンモック 75 円、蒲呉座・網 21 円、午睡場日除 29.70 円、釜・体温器 8.80 円、整理箱・黒板掛 5.99 円。間食費の内訳は、牛乳 105.17 円、菓子 149.84 円、児童昼食費 54.43 円。謝儀および手当の内訳は、教師 152 円、校医等 19.88 円、使丁 21 円、夜警 7 円、林借用 5 円。雑費の内訳は、諸用紙及び印刷費 8.745 円、絵葉書費 45 円、児童用肩章及び木札 3.50 円、人夫費 8.40 円、諸雑費 31.695 円。収支差引残金 86 円 84 銭は翌年度準備金として繰り越された。
- ³² 帰営後、長崎李王属を使として桃井小学校児童に御菓子料一封を下賜した。翌日および翌々日午前も敷島河原の見学を予定していた。「御滞橋在中の李王世子殿下 林間學校御成 真黒な元気の児童御覽 御微笑を以て御答禮遊ばす」、『上毛新聞』大正 12 年 8 月 21 日（火）、第 11651 号、第 3 面。
- ³³ 「小出河原を中心とする 前橋第二公園計畫成る 天然の風致を利用して今秋迄には悉く竣成す」『上毛新聞』大正 12 年 7 月 27 日（金）、第 11627 号、第 5 面。
- ³⁴ 「小出河原を中心にして 前橋の大公園 設計成り測量に」『上毛新聞』大正 12 年 8 月 14 日（火）、第 11144 号、第 5 面。
- ³⁵ 「漸く公園化して来た 前橋郊外公園 四間道路を開削して 一般の利便をはかる」『上毛新聞』大正 13 年 7 月 26 日（土）、第 11978 号、第 5 面。
- ³⁶ 1 組「赤」1 学年（男 14, 女 11）、2 組「紫」2 学年（男 24, 女 15）、3 組「緑」3, 4 学年（男 29）、4 組「緑」3, 4 学年（女 25）、5 組「黄」5, 6 学年（男 8, 女 24）と、3, 4 学年は男女別編成であった。
- ³⁷ ただし時間割中 10:30-11:30 の時間帯に、日によって図画、綴方、見学が挿入された。
- ³⁸ 設備費の内訳は、物置舎・午睡場等 80 円、ハンモック 145 円、蒲呉座・網 26.38 円。間食費の内訳は、牛乳 105 円、菓子 147.80 円、児童昼食費 61.23 円。謝儀および手当の内訳は、教師 154 円、校医等 30 円、

使丁 21 円、夜警 7 円、林借用 10 円。雑費の内訳は、諸用紙及び印刷費 4.92 円、絵葉書費 30 円、児童用肩章及び木札 3.79 円、人夫費 8.40 円、諸雑費 34.38 円。収支差引残金 9 円 94 銭は翌年度準備金として繰り越された。

- ³⁹ 「林間で学藝會 市内桃井校で」、『上毛新聞』大正 13 年 8 月 14 日（木）、第 11996 号（5 面）。同紙面の右上には「残暑」と題して同校児童による相撲の様子を撮影した写真が掲載されている。
- ⁴⁰ 鈴木校長は、皮膚が頗る壮健になり、冬季に風邪に罹ることが極めて少なくなったと力説した。「嫌われた小出河原 第二公園俗化 が名の下に桃井校は 林間学校の計劃中止 敷島だけが歡民山で」、『上毛新聞』大正 13 年 8 月 2 日（土）、第 11984 号、第 5 面。
- ⁴¹ 前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第 3 卷（近世編）』前橋市、1975 年、951-953 頁。林間学校の開催地は、観民稲荷神社の西、旧群馬県立前橋工業高等学校構内（現ベイシア）から（株）富士機械の構内にかけての一带であったと推測される。
- ⁴² 「敷島林間学校響應」、『上毛新聞』大正 13 年 8 月 6 日（水）、第 11988 号、第 3 面。敷島・桃井両校に、かかる御馳走の響應が毎週 1 回予定された。
- ⁴³ 「林間学藝発表會」、『上毛新聞』大正 13 年 8 月 12 日（火）、第 11994 号、第 2 面。
- ⁴⁴ 「市内各小學校 林間校開所式」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 1 日（土）、第 12333 号、第 5 面。「坊ちゃん嬢ちゃん 小出ヶ原の林間で 面白い幼稚園開始」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 4 日（火）、第 12336 号、第 4 面。
- ⁴⁵ 「中川校唯一の後援者は百万長者の江原氏であ」ったが、江原一族は、1 週に 1 度は必ず肉類や五目飯を児童に振舞った。「子供禮讃 林間學校や 夏季特別教養所など 市内各校の休暇施設 きのふ一齊終了」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 22 日（土）、第 12354 号、第 1 面。
- ⁴⁶ 「坊ちゃん嬢ちゃん 小出ヶ原の林間で 面白い幼稚園開始」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 4 日（火）、第 12336 号、第 4 面。
- ⁴⁷ 『前橋市史』第五卷、1984 年、第十二章 軍事・行幸啓・警察、1224-1225 頁。
- ⁴⁸ 元市議の中村初三郎が児童への配食に奮闘した。「敷島林間校 各種企て 廿一日間行事」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 6 日（木）、第 12338 号、第 3 面。
- ⁴⁹ 「雨に祟られ目茶目茶の 見るも気の毒な 林間校 秋山桃井校長残念がり その成績を語って曰く」、『上毛新聞』大正 14 年 8 月 20 日（木）、第 12352 号、第 3 面。
- ⁵⁰ 前橋市では、同年 10 月 2 日から 20 日まで、道路および郊外公園の名称懸賞募集を行ったところ、予期以上の応募があり、郊外公園については「敷島公園」が一等となった。「道路公園名 當選者 けふ賞金授與」、『上毛新聞』大正 14 年 10 月 31 日（土）、第 12421 号（5 面）。応募者 1167 名中 334 名を以て決定した。『前橋市史』第四卷、1979 年、第十章 公団 第二節 敷島公園、1114 頁以下。
- ⁵¹ 「前橋各校の 夏期施設 桃井敷島幼稚園は林間教養」、『上毛新聞』大正 15 年 7 月 14 日（水）、第 12666 号、第 2 面。
- ⁵² 清王寺町の東電変電所主任の佐藤赤は率先して 20 円の寄付を申し込んできたという。「林間学校…桃井校は 御晝の辯當を一週 一度づつ子供に給與 八月一日から三週間開設」、『上毛新聞』大正 15 年 7 月 27 日（火）、第 12679 号、第 3 面。
- ⁵³ 「子供王国 吉例の林間学校 きのふから小出河原で 桃井敷島両校と幼稚園 よく學びよく遊ぶ」、『上毛新聞』大正 15 年 8 月 2 日（月）、第 12684 号、第 2 面。
- ⁵⁴ 午後 3 時から期間中尽力した教師の慰労会を開くところがあった。「林間学校 好成績で終わる」、『上毛新聞』大正 15 年 8 月 22 日（日）、第 12704 号、第 2 面。

- ⁵⁵ 地元の名士・江原芳平より職員児童へ昼食が提供された。『中川小学校百年のあゆみ』昭和 49 年、32 頁
- ⁵⁶ 「萬斛の涼味漂ふ 子供の王國 桃井、敷島、幼稚園など 昨日林間学校の幕開き」『上毛新聞』昭和 2 年 8 月 2 日（木）、第 13034 号、第 3 面。
- ⁵⁷ 「前橋各校の 夏期施設 桃井敷島幼稚園は林間教養」、『上毛新聞』大正 15 年 7 月 14 日（水）、第 12666 号、第 2 面。
- ⁵⁸ 「前橋の 林間学校 好成绩裡に今夕終了式挙行」『上毛新聞』昭和 2 年 8 月 21 日（日）、第 13053 号、第 3 面。幼稚園児も「澆冽味を加はへて」いたことは林間聚落の生活の効果を立証している、と報じられた。「緑の林 左様なら（幼稚園の林間保育終る）」『上毛新聞』昭和 2 年 8 月 27 日（土）、第 13059 号、第 3 面。
- ⁵⁹ 「桃井小学校 林間学校 八月一日から」『上毛新聞』昭和 3 年 7 月 19 日（木）、第 13372 号、第 2 面。
- ⁶⁰ 「颱風に祟られた 林間学校 ハンモックの午睡も 破られ勝ちな第一日」『上毛新聞』昭和 3 年 8 月 4 日（土）、第 13388 号、第 3 面。
- ⁶¹ この年の市内各小学校児童数は以下のとおりである。久留万（尋常 844、高等 1031）、桃井 1965、中川 1471、敷島 1901、城南 496、城東 1276。「前橋市事務報告書」（昭和 3 年 1-12 月）。
- ⁶² 「前橋各小学校の 夏季休暇施設 ◇…虚弱児童に對する ◇…教養を目的として」『上毛新聞』昭和 3 年 7 月 21 日（土）、第 13374 号、第 2 面。
- ⁶³ 「身体虚弱児の 林間聚落閉所式に 前橋市醫の狩野氏が 呼吸運動の必要を叫ぶ」『上毛新聞』昭和 3 年 8 月 22 日（水）、第 13406 号、第 3 面。
- ⁶⁴ 同書目次は、第 1 疾病、第 2 学校診療所、第 3 身体虚弱児、第 4 児童保健法、第 5 体育、第 6 体質、第 7 運動前後ノ注意、第 8 教授衛生となっており、5 頁で腺病性体質の予防及治療の 1 つとして林間「コロニー」有効ナリ、と述べているほか、37-38 頁で二、前橋市夏季林間「コロニー」として、林間「コロニー」の概要を記述している。
- ⁶⁵ 同書、21-22 頁。第五 養護 四、林間学校。目次構成は、第一教授衛生、第二体育運動、第三身体検査、第四衛生的訓練、第五養護、第六設備、第七学校診療所となっており、林間学校については、第二体育運動 三、郊外に於ける体育（二）休暇と体育衛生の 3 でも言及されている（8 頁）ほか、第五養護の四で言及されている（21-22 頁）。
- ⁶⁶ 「幼稚園の 林間保育 来廿五日から」『上毛新聞』昭和 3 年 7 月 7 日（土）、第 13360 号、第 2 面。「前橋幼稚園 林間保育 二十五日から」『上毛新聞』昭和 3 年 7 月 25 日（水）、第 13378 号、第 2 面。
- ⁶⁷ 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編 9 近代現代 3』群馬県、平成 2 年、194 頁。
- ⁶⁸ 「大西衛生官が 林間学校視察」、『上毛新聞』大正 15 年 8 月 10 日（火）、第 12692 号、第 2 面、「林間学校…本縣の如く規則的統一を 示してゐるものは全國に その類例を見ないと ◇大西學校衛生官語る」、『上毛新聞』大正 15 年 8 月 14 日（土）、第 12696 号、第 3 面。
- ⁶⁹ 聯隊裏の小園か観音山などが候補に挙がったが、場所が狹隘であった。テントやハンモックは市費から支出し、おやつは有志の寄付に待つとした。「高崎でも林間学校 明年から施設 目下研究中」『上毛新聞』大正 11 年 8 月 25 日（金）、第 11304 号、第 5 面。
- ⁷⁰ 高崎市教育史研究編さん委員会編『高崎市教育史 上巻』高崎市教育委員会、1978 年、727-728 頁。
- ⁷¹ 経費は、中央小が 120 円（市教育会補助金 75 円、後援会負担 45 円）、北小は 87 円 10 銭（市教育会補助金 75 円、後援会負担 10 円 10 銭、有志寄附 2 円）で、後者の支出内訳は蒲ゴザ 10 枚 12 円 50 銭、児童間食費 37 円、職員手当 22 円 50 銭、記念写真費 7 円 70 銭、使丁手当等 7 円 40 銭。
- ⁷² 高崎市教育史研究編さん委員会編『高崎市教育史 資料編 10 近代・現代Ⅱ』高崎市、平成 10 年、694-696 頁。

- ⁷³ 「高崎南小学校 林間学校開設」『上毛新聞』大正14年8月3日（金）、第12335号、第2面。
- ⁷⁴ 毎日午前7時半に高崎駅前に集合整列人員点検を行い、午前7時47分発の汽車に乗車、午前8時ぐんま八幡駅降車、帰りは午後4時47分ぐんま八幡発の汽車に乗車、午後5時高崎駅着。課業は学習、はだか体操、遊戯、お話、自由遊戯、含嗽、静座、深呼吸、水遊び、自由学習、唱歌、娯楽等。『高崎市教育史 資料編10 近代・現代Ⅱ』前掲、697頁。
- ⁷⁵ 「高崎南校の 林間学校 一日から開始」『上毛新聞』昭和2年8月7日（日）、第13039号、第3面。
- ⁷⁶ 「高崎南校の林間学校 少林山で開く」『上毛新聞』昭和4年8月2日（金）、第15738号、第2面。
- ⁷⁷ 「碓氷八幡神社で林間学校を開く」『上毛新聞』昭和18年7月20日（火）、第19049号、第2面。
- ⁷⁸ 「高崎南校の 林間学校 其他特別施設」『上毛新聞』昭和2年7月30日（土）、第13031号、第3面。
- ⁷⁹ 「高崎盲学校の林間学校」『上毛新聞』昭和10年7月28日（日）、第16160号、第2面。
- ⁸⁰ 収入の内訳は、伊勢崎教育会負担金250円、伊勢崎町学齢児童保護会負担金250円、伊勢崎町婦人会寄附金50円、有志寄附金157円92銭。支出内訳は、設備費60円6銭、給与品費266円37銭（牛乳・パン等）、消耗品費19円37銭、印刷費（絵葉書）29円40銭、謝礼209円80銭、雑費43円24銭。伊勢崎市編『伊勢崎市史 通史編3 近現代』ぎょうせい、平成3年、342-343頁。
- ⁸¹ 日付は大正15年7月27日。「大正十五年七月 伊勢崎林間学校開校式案内」、伊勢崎市編『伊勢崎市史 資料編4 近現代Ⅰ』ぎょうせい、昭和62年、557頁。資料115。
- ⁸² 昭和2年1月20日発行。「大正十五年八月 伊勢崎林間学校」、同上書、557頁。資料116。
- ⁸³ 同上書、557-564頁。
- ⁸⁴ 同上。4回目の収入内訳は、伊勢崎教育会補助金250円、伊勢崎町学齢児童保護会補助金400円、有志寄附金80円。支出内訳は、設備費127円7銭、児童給与品費237円1銭（牛乳・パン等）、消耗品費19円30銭、印刷費（絵葉書）40円、謝礼240円50銭、雑費17円69銭。
- ⁸⁵ 『伊勢崎林間学校』（前橋市立図書館所蔵）、「伊勢崎林間学校日誌」（抄）『群馬県史 資料編22 近代現代6』（昭和58年、141-146頁）に所載。
- ⁸⁶ 「伊勢崎町の林間学校 華蔵寺畔開設」『上毛新聞』昭和5年7月11日（金）、第14070号、第3面。
- ⁸⁷ 遠方からの参観者としては、8月11日足尾小学校訓導、上毛新聞社写真班、18日東京高等師範学校教授（佐々木秀一）、19日邑楽郡小泉小学校訓導が来校した。
- ⁸⁸ 「林間学校開設や公設水泳場 伊勢崎教育会今夏の催し 両所共八月いっぱい」『上毛新聞』昭和6年7月31日（金）、第14648号、第3面。
- ⁸⁹ 「伊勢崎の林間学校と水泳」『上毛新聞』昭和9年7月31日（火）、第15801号、第3面。 「伊勢崎の林間学校開校」『上毛新聞』昭和9年8月2日（木）、第15803号、第3面。
- ⁹⁰ 「伊勢崎の林間学校」『上毛新聞』大正11年8月2日（木）、第16527号、第2面。
- ⁹¹ 『伊勢崎市史 通史編3 近現代』前掲、343頁。
- ⁹² 19日より2日間は桐生東小学校、21日大間々小学校、22日蕨川小学校、23日桐生東小学校にて開催。「動的教育講習」『上毛新聞』大正10年8月12日（金）、第10939号、第2面。
- ⁹³ 「林間学校の成績 昨年より好成績にて高崎桐生等より参観多数」、『上毛新聞』大正11年8月23日（水）、第11302号（2面）。
- ⁹⁴ 「桐生市の林間学校 新宿吹上地内に變更した…」『上毛新聞』大正12年7月27日（金）、第11627号、第5面。
- ⁹⁵ 物置小屋を設けて事業を助ける者もあった。「桐生林間学校 寄附者が續出」『上毛新聞』大正12年7月28日（土）、第11628号、第2面。

- ⁹⁶ 「林間学校」『桐生市教育会報 第 5 号』大正 13 年 3 月 25 日、桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史上巻』（桐生市教育委員会、昭和 63 年）所収、734-736 頁。
- ⁹⁷ 「桐生林間学校 昨日から開始」『上毛新聞』大正 12 年 8 月 2 日（木）、第 11632 号、第 5 面。
- ⁹⁸ 「林間学校」前掲、『桐生市教育史 上巻』所収、736-744 頁。
- ⁹⁹ 荻野市助役は成績の良好であったことを喜んだ。「桐生林間校閉鎖」『上毛新聞』大正 13 年 8 月 22 日（金）、第 12004 号、第 5 面。
- ¹⁰⁰ 「林間学校の思い出」前掲、『桐生市教育史 上巻』所収、758-759 頁。
- ¹⁰¹ 「第貳回 林間学校実況」（主催 桐生市教育会）大正拾参年八月。下部に「イワタ」と小さく印字あり（撮影した写真館の名称であろう）。裏面には「郵便はかき」POST CARD POST KARTE とある。
- ¹⁰² 「林間校の成績 桐生教育会の」『上毛新聞』大正 13 年 8 月 9 日（土）、第 11991 号、第 2 面。
- ¹⁰³ 「第参回 林間学校実況」（主催 桐生市教育会）大正拾四年八月。下部に「岩田寫」と小さく印字あり（撮影した写真館の名称であろう）。裏面には「郵便はかき」UNION POSTALE UNIVERSELLE とある。封筒の左上に「柳瀬昌史殿」とある。参加者の氏名であろう。
- ¹⁰⁴ 昼寝の時間には上級生が下級生のために寝台を小屋から出してきて、前橋の赤十字支部から出張している堀越看護婦が幼い児童の面倒を見て寝台に眠らせた。前年の効果として冬に風邪をひかなくなり各家庭から喜びの言葉が来ていると西校の柳瀬校長は語った。「林間学校…桐生でも 錦櫻橋畔の檜林で 教育會主催で三週間」『上毛新聞』大正 14 年 8 月 6 日（木）、第 12338 号、第 5 面。
- ¹⁰⁵ 「桐生各校の 林間学校 渡良瀬河畔で」『上毛新聞』大正 15 年 7 月 11 日（日）、第 12663 号、第 3 面、「桐生教育會 林間学校 来月一日から」『上毛新聞』大正 15 年 7 月 17 日（土）、第 12669 号、第 3 面。
- ¹⁰⁶ 2 週間目の成績として、140 名中増加した者 88 人、減った者 39 人、平均で 56 匁増加、最も増加した者は 560 匁増えた。「林間学校 桐生成績良好」『上毛新聞』大正 15 年 8 月 18 日（水）、第 12700 号、第 3 面。
- ¹⁰⁷ 『桐生市教育史 上巻』前掲、747 頁。
- ¹⁰⁸ 「林間学校 桐生学校開催」『上毛新聞』昭和 2 年 7 月 20 日（火）、第 13013 号、第 3 面。「桐生林間学校 八月一日から」『上毛新聞』昭和 2 年 7 月 30 日（土）、第 13031 号、第 3 面。自動車による送迎は、地元の南校を除く 3 校で行われた。「桐生林間学校 一日から開始」『上毛新聞』昭和 2 年 8 月 2 日（火）、第 13034 号、第 2 面。
- ¹⁰⁹ 児童の平均体重は、1 日 19.1、7 日目 19.3、14 日目 19.1 であった。「桐生林間学校 成績頗る良好」『上毛新聞』昭和 2 年 8 月 18 日（木）、第 13050 号、第 3 面。
- ¹¹⁰ 「林間学校 今夏は水源地で 桐生市の夏期施設決る」『上毛新聞』昭和 6 年 7 月 15 日（水）、第 14632 号、第 3 面。
- ¹¹¹ 「林間学校の効能は此の通り 目方は増え何れもぴんぴん 桐生林間学校終る」『上毛新聞』昭和 6 年 8 月 23 日（日）、第 14671 号、第 3 面。
- ¹¹² 「桐生林間校好成绩裡に終る 血色の良くなった子供達に保護者達は大満足」『上毛新聞』昭和 7 年 8 月 20 日（土）、第 15099 号、第 3 面。
- ¹¹³ 「桐生林間学校閉校式」『上毛新聞』昭和 8 年 8 月 18 日（金）、第 15458 号、第 2 面、「桐生林間学校終る」『上毛新聞』昭和 8 年 8 月 22 日（火）、第 15462 号、第 3 面
- ¹¹⁴ 「桐生林間学校」『上毛新聞』昭和 9 年 7 月 31 日（火）、第 15801 号、第 3 面
- ¹¹⁵ 「桐生林間学校 好成绩」『上毛新聞』昭和 9 年 8 月 23 日（木）、第 15824 号、第 3 面
- ¹¹⁶ 「林間学校で卒倒 日光直射下に虚弱児童を立たせて 桐生市當局で問題化」『上毛新聞』昭和 11 年 8 月 2 日（火）、第 16527 号、第 1 面。

- 117 「桐生林間学校」『上毛新聞』昭和12年7月6日（火）、第16861号、第1面。
- 118 以上、収容数増加の推移については、「第190表 各年ニ於ケル林間学校児童数」を参照。『桐生市教育史 上巻』所収、760-761頁。
- 119 「林間学校 大胡の小学校で 八月一日から三週間 お話しやら晝寝やら よく遊びよく学ぶ」『上毛新聞』大正15年7月16日（金）、第12668号、第2面。
- 120 「藤岡小学校の 夏季聚落 神流川で水泳」『上毛新聞』昭和11年8月3日（金）、第16528号、第2面。
同校教員はもとより、校医の相川廣三の尽力が特筆された。
- 121 「澁川町長の林間学校視察」『上毛新聞』昭和8年8月13日（日）、第15453号、第3面。
- 122 「富岡町の 林間学校」『上毛新聞』昭和15年8月3日（日）、第17974号、第2面。
- 123 草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第貳巻』草津町役場、平成4年、595頁。
- 124 「草津林間学校 浴客児童も参加」『上毛新聞』昭和8年8月2日（水）、第15442号、第2面。
- 125 「岩島恒心會で林間学校 婦人部には尚見るべき事業澤山」『上毛新聞』昭和6年8月18日（火）、第14666号、第2面。
- 126 日本学校保健会編（文部省監修）『学校保健百年史』第一法規、昭和48年、79頁。
- 127 「高原学校 児童出発す」『上毛新聞』昭和8年8月3日（木）、第15443号、第2面。
- 128 「日赤の高原学校 元気な毎日 糖塚山頂上で萬歳」『上毛新聞』昭和8年8月8日（火）、第15448号、第2面。
- 129 「高原学校終る」『上毛新聞』昭和8年8月16日（水）、第15456号、第2面。
- 130 「北軽井澤に 林間学校 萩原訓導の篤志」『上毛新聞』昭和15年8月11日（日）、第17582号、第2面。
- 131 「暑中の鍊成 前橋国民学校の施設」『上毛新聞』昭和17年7月13日（月）、第18679号、第2面。
- 132 「結核児童の 夏期聚落 新鹿澤に準備」『上毛新聞』昭和16年7月3日（木）、第18305号、第2面。
- 133 「子供禮讃 林間学校や 夏季特別教養所など 市内各校の休暇施設 きのふ一齊終了」、『上毛新聞』大正13年8月22日（土）、第12354号、第2面。
- 134 狩野寿平『学校衛生ニ関スル研究』前橋市乙種学事会、昭和3年、37頁。
- 135 前橋市立中川小学校『中川小学校百年のあゆみ』前橋市立中川小学校、1974年、32頁。大正15年8月19日には、県視学の植田好造が視察している。なお同校区の有力者・江原芳平より職員児童へ昼食が提供された。
- 136 「病弱児童を水平線へ 導くべく前橋市營の林間学校 設立の聲が漸やく高調し来る 視學の一行は位置の目星もつけてゐる」『上毛新聞』昭和2年8月15日（月）、第13047号、第3面。
- 137 『群馬県史 通史編9 近代現代3』前掲、194頁。桃井小学校では、市内小学校の「合同林間学校」と表現している。『桃井校百年のあゆみ』昭和48年、59頁。
- 138 『敷島小学校百年史』前橋市立敷島小学校、昭和48年、142頁。『前橋教育史』上巻、前橋市、1986年、88-89頁。第4章 大正から昭和初期の教育 第2節 大正期の初等教育 三 学校衛生と林間学校 林間学校
- 139 『中川小学校百年のあゆみ』前橋市立中川小学校、昭和49年、50-51頁。『敷島小学校百年史』前掲、143頁。同年3月、敷島小学校は火災で校舎を全焼した。
- 140 野口穂高「「赤坂臨海教育団」に関する一考察：大正期の「林間学校・臨海学校」をめぐる議論に着目して」『論叢:玉川大学教育学部紀要』2012年、75頁。
- 141 小田俊三『野外学校の学理と実際』前掲、85-87頁。
- 142 『前橋教育史』前掲、881-891頁。
- 143 「前橋各小学校児童の林間学校決まる 場所は南橋村田口の山林 大掛りに準備も整ふ」『上毛新聞』昭和4

年 7 月 7 日（日）、第 15712 号、第 3 面。

¹⁴⁴ 「三百の小供を集めて 前橋の林間学校 廣桃堰の緑濃き松林にて 八月一日より挙行…狩野市醫談」『上毛新聞』昭和 4 年 7 月 27 日（土）、第 15732 号、第 3 面。ただし『敷島小学校百年史』（前掲）では敷島小 68 名となっている。同校の負担金は 117 円。142-143 頁。

¹⁴⁵ 「前橋林間学校 けふ十時開所式挙行」『上毛新聞』昭和 4 年 8 月 1 日（木）、第 15737 号、第 2 面。

¹⁴⁶ 「前橋の幼稚園 林間保育を行ふ 敷島公園松林にて」『上毛新聞』昭和 4 年 7 月 16 日（火）、第 15721 号、第 2 面。

¹⁴⁷ 「前橋林間学校 きのふから開始」『上毛新聞』昭和 5 年 8 月 4 日（月）、第 14094 号、第 2 面。前橋各小学校後援会が発表した「夏季林間学校の概要」（昭和 5 年 9 月）によれば、市よりの補助金 350 円、市学齢児童保護会より 500 円、各小学校後援会より 500 円を以て経費に充てた。雑木林への往復には自動車を利用したが、敷島小学校児童の一部は徒歩であった。前橋市立中川小学校編『中川小学校百年のあゆみ』前橋市立中川小学校、1974 年、51-52 頁。なお『前橋市史』第 5 巻は 250 頁に「夏季林間学校の概要」を引用しているが、同頁には誤記が 3 か所ある。

¹⁴⁸ 「前橋林間学校 今年場所は変更 岩神バラック裏の櫓林に内定 開設の準備に着手す」『上毛新聞』昭和 5 年 7 月 10 日（木）、第 14069 号、第 3 面。

¹⁴⁹ 『中川小学校百年のあゆみ』前掲、52 頁。

¹⁵⁰ 「前橋の林間学校 本年も観民山で 該当児童の撰別其他準備開始」『上毛新聞』昭和 6 年 7 月 3 日（金）、第 14620 号、第 3 面。

¹⁵¹ 「前橋小学校夏季 衛生施設計画 眼鏡使用、結核予防林間学校等 小学校長會議で決定」『上毛新聞』昭和 7 年 7 月 7 日（木）、第 15055 号、第 2 面。

¹⁵² 「前橋の林間学校 今年も開設」『上毛新聞』昭和 7 年 7 月 8 日（金）、第 15056 号、第 2 面。

¹⁵³ 「前橋各校の林間学校 1 日から開校」『上毛新聞』昭和 7 年 8 月 2 日（木）、第 15081 号、第 3 面。

¹⁵⁴ 「前橋の林間学校 岩神町工兵廠舎裏で」『上毛新聞』昭和 8 年 8 月 2 日（月）、第 15442 号、第 3 面。

¹⁵⁵ 「夏期保育に付いて 春山前橋幼稚園長談」『上毛新聞』昭和 8 年 8 月 1 日（火）、第 15441 号、第 3 面。

¹⁵⁶ 「前橋林間学校開所式」『上毛新聞』昭和 9 年 8 月 2 日（木）、第 15803 号、第 3 面。

¹⁵⁷ 前橋市立各小学校後援会連合会「第 6 回前橋林間学校施設状況報告」（前橋教育資料館蔵）によると、4 月の定期身体検査の結果、栄養「丙」と診査された児童を主とし、併せて日常虚弱児童と認められる者を候補者として、更に 7 月に校医が再検査して林間教養を可とするものを選び、家庭よりの希望を徴して収容した。なお開催した雑木林は横地桂作氏の所有地。また各小学校後援会の負担金は、収容児童人員に応じた額である。

¹⁵⁸ ただし敷島小学校には 1 台のみ（居住地が開催地から遠い児童用）とし、多くの児童は徒歩とした。なお、同校は同年度に在籍者数のピークを迎え、2680 人を擁していた。『敷島小学校開校 130 周年記念誌』前橋市立敷島小学校、平成 14 年、9 頁。

¹⁵⁹ 「第 6 回前橋林間学校施設状況報告」前掲「効果の概要」。

¹⁶⁰ 「前橋林間学校 水源地附近で」『上毛新聞』昭和 10 年 7 月 11 日（木）、第 16143 号、第 2 面。

¹⁶¹ 「前橋林間学校開校」『上毛新聞』昭和 10 年 8 月 2 日（木）、第 16165 号、第 2 面。

¹⁶² 「前橋林間学校閉校」『上毛新聞』昭和 10 年 8 月 22 日（木）、第 16185 号、第 3 面。桃井小学校の保護者宛「通知書」（昭和 10 年 7 月、前橋教育資料館蔵）。

¹⁶³ 「昭和十年度 前橋市林間学校概要」（前橋教育資料館蔵）。

¹⁶⁴ 「林間学校風景（2）」（前橋教育資料館蔵）。

¹⁶⁵ 『学校衛生講習会筆記』前橋市学校医会、前橋市乙種学会、昭和 10 年 6 月、22-24 頁。

- ¹⁶⁶ 桃井小学校では、栄養が「丙」とみなされた児童は低学年で多く、6 学年全体で 99 名いたが、林間学校入学者数は 70 名に絞られた。「昭和十一年度 虚弱児童調」（前橋教育資料館蔵）。
- ¹⁶⁷ 「昭和十一年度 前橋市林間学校概要」（前橋教育資料館蔵）。
- ¹⁶⁸ 「昭和十一年度 前橋林間学校収支予算書」（前橋教育資料館蔵）。
- ¹⁶⁹ 「第八回前橋林間学校施設状況報告」（前橋教育資料館蔵）。開催中、学校長は 4 日ないし 3 日で交代とある。
- ¹⁷⁰ 大霞会編『内務省史 第三巻』原書房、1980 年、231 頁。
- ¹⁷¹ 同上書、314 頁。
- ¹⁷² 宮原立太郎『虚弱児童の養護及治療方針』自立社、昭和 8 年、5 頁。医学博士（光線治療）の宮原は同書の自序で、虚弱児童数が全国において百万を算し学校衛生の核心をなすに至った、と評した。
- ¹⁷³ 同上書、19 頁。
- ¹⁷⁴ 大西永次郎監修『施設中心 虚弱児童の養護』前掲、276 頁。
- ¹⁷⁵ 「各林間学校へ 栄養食実施 県衛生課は大童」『上毛新聞』昭和 8 年 8 月 9 日（水）、第 15449 号、第 3 面。
- ¹⁷⁶ 「婦恋村に 日赤高原学校 三十日打合せ會」『上毛新聞』昭和 8 年 7 月 30 日（日）、第 15439 号、第 3 面。
- ¹⁷⁷ 注 105 に同じ。
- ¹⁷⁸ 「桐生林間学校 水道水源地附近で」『上毛新聞』昭和 8 年 7 月 7 日（火）、第 15416 号、第 3 面。
- ¹⁷⁹ 「前橋市の林間学校 八月一日開設」『上毛新聞』昭和 9 年 7 月 15 日（木）、第 15785 号、第 3 面および注 144。
- ¹⁸⁰ 「工兵廠舎で林間学校 虚弱児童三百五十名に 栄養食の献立打合せ」『上毛新聞』昭和 9 年 7 月 28 日（火）、第 15437 号、第 2 面。
- ¹⁸¹ 「第六回前橋林間学校施設状況報告」（前掲）の「栄養上の注意」等。
- ¹⁸² 「林間学校の栄養食」『上毛新聞』昭和 9 年 7 月 31 日（火）、第 15801 号、第 3 面。
- ¹⁸³ 「健康色に輝く児童 林間学校終る」『上毛新聞』昭和 9 年 8 月 22 日（水）、第 15823 号、第 3 面。
- ¹⁸⁴ 「日赤の保養所 児童はめきめき肥る」『上毛新聞』昭和 9 年 8 月 14 日（火）、第 15815 号、第 2 面。
- ¹⁸⁵ 「桐生林間学校 栄養食で楽しいお昼食」『上毛新聞』昭和 10 年 8 月 10 日（土）、第 16173 号、第 3 面。
- ¹⁸⁶ 「桐生林間学校」『上毛新聞』昭和 11 年 7 月 22 日（水）、第 16516 号、第 3 面。
- ¹⁸⁷ 「桐生林間学校閉づ」『上毛新聞』昭和 11 年 8 月 22 日（火）、第 16547 号、第 2 面。
- ¹⁸⁸ 「林間学校児童の栄養に力瘤 県衛生課で指導」『上毛新聞』昭和 12 年 7 月 21 日（水）、第 16876 号、第 2 面。
- ¹⁸⁹ 「桐生市の林間学校 八月一日から」『上毛新聞』昭和 12 年 7 月 12 日（月）、第 16867 号、第 2 面。
- ¹⁹⁰ 「前橋の林間学校 けふ開校式 敷島公園で三週間」『上毛新聞』昭和 12 年 7 月 22 日（木）、第 16877 号、第 2 面。
- ¹⁹¹ 狩野壽平『私の学校衛生に対する半生涯』私家版、1938 年、88 頁。1939 年 2 月にまとめられた久留万高等小学校の『本校の教育』において、単独高等小学校としてスタートした同校が「夏季聚落」という表現を用いて「体格概評栄養ともに劣等なる児童は学校医の診断決定により、保護者の同意を得て夏季休業中三週間之に参加せしむ。」と記しているのは、狩野の影響が考えられよう。『本校の教育』前橋市久留万高等小学校、昭和 14 年、3 頁、90 頁。六 養護（二）養護の実際 4 衛生施設 （13）夏季聚落
- ¹⁹² 『敷島小学校百年史』前掲、143 頁。敷島小学校の夏季学校には久留万校の児童 2 名も参加した。『桃井校百年のあゆみ』昭和 48 年、59 頁。
- ¹⁹³ 「昭和十三年度 前橋市夏季学校概要」（前橋教育資料館蔵）。各校配当に城南が脱落。
- ¹⁹⁴ 『桐生市教育史 上巻』前掲、760 頁。

- ¹⁹⁵ 西小では、当時すでに自校調理による副食給食を全校児童に実施していた。1週間の献立は、カレー、五目煮、魚フライ、炒り豆腐、甘煮、コロッケ、大和煮。「第40表 桐生市夏季学園児童栄養副食物献立表」、桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史 下巻』桐生市教育委員会、平成5年、112-119頁。
- ¹⁹⁶ 「桐生夏季学園終る」『上毛新聞』昭和13年8月21日（日）、第17269号、第2面。
- ¹⁹⁷ 「前橋夏期学校終る」『上毛新聞』昭和14年8月9日（水）、第17618号、第2面。
- ¹⁹⁸ 「夏季学校閉校式」『上毛新聞』昭和15年8月10日（土）、第17581号、第2面。
- ¹⁹⁹ 「今年の林間学校 夏休みの養護施設」『上毛新聞』昭和16年7月4日（金）、第18306号、第2面。
- ²⁰⁰ 「前橋の夏期学校」『上毛新聞』昭和16年7月26日（土）夕刊、第18328号、第2面。
- ²⁰¹ 「夏季学校閉校式」『上毛新聞』昭和16年8月16日（土）、第18349号、第2面。
- ²⁰² 『松風』67頁。ただし墓碑には4日とある。墓石裏面に昭和18年11月狩野清建之と刻さる。墓碑の横には、壽平と並び妻の名前が併記されている。昭和20年2月21日 清子 68才
- ²⁰³ 「暑中の鍊成 前橋国民学校の施設」『上毛新聞』昭和17年7月13日（月）、第18679号、第2面。
- ²⁰⁴ 学校ごとの参加児童数は、桃井72、城南54、城東62、敷島57、中川66、若宮39であった。「前橋夏期学校ひらく」『上毛新聞』昭和18年7月27日（月）、第18693号、第3面。なお課外の特別行事として、レコード鑑賞、唱歌会、お伽会、映画界を行うことがあった。「日課配当表 昭和十七年度 前橋市夏季学校」（前橋教育資料館蔵）。
- ²⁰⁵ 「前橋市夏季学校出席児童家庭注意」（昭和17年7月：前橋教育資料館蔵）、羽鳥耕作桃井学校長名で書かれた同年7月13日付の保護者宛て案内には「養護保健ノ任」とある。
- ²⁰⁶ 「前橋夏季学校」『上毛新聞』昭和17年8月7日（金）、第18704号、第2面。
- ²⁰⁷ 「前橋市桃井夏季養護学級児童家庭注意」および夏季学校の保護者宛て案内兼申込書2件ならびに保護者会案内（昭和17年7月：前橋教育資料館蔵）。桃井小では、訓導が5～7日間交代勤務、看護婦と給食係は毎日出勤した。校長と校医は初日のみの勤務体制であった。「昭和十七年度 夏季学校関係者出勤日割（桃井学校）」（前橋教育資料館蔵）。
- ²⁰⁸ 財団法人結核豫防會編（重田定正・新井英夫共著）『学校と結核豫防』大日本教化図書株式会社、昭和17年、80頁。
- ²⁰⁹ 日本学校保健会編『学校保健百年史』前掲、221頁。
- ²¹⁰ 「前橋夏季学校開く」『上毛新聞』昭和18年7月24日（土）、第19053号、第2面。同月中旬の報道では12日まで、とされていた。「前橋の夏季学校」同紙、同年7月15日（木）、第19044号、第2面。
- ²¹¹ 「前橋の夏季学校開設」『上毛新聞』昭和19年7月21日（金）、第19414号、第3面。
- ²¹² 「夏期学校始まる 前橋桃井学校にて 今年は校内に開設」『上毛新聞』昭和19年7月3日（日）、第19416号、第3面。
- ²¹³ 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編9 近代現代3』群馬県、平成2年、194頁。
- ²¹⁴ 『桐生市教育史 上巻』前掲、760頁。ただし、昭和19年まで続けられた、との記述もある。『桐生市教育史 下巻』前掲、119頁。
- ²¹⁵ 『中川小学校百年のあゆみ』前掲、52頁。『敷島小学校百年史』前掲、144頁。

参考文献

- 日本学校保健会編（文部省監修）『学校保健百年史』第一法規、1973年
- 大霞会編『内務省史 第三巻』原書房、1980年
- 佐鳥俊一編『群馬県百科事典』上毛新聞社、1979年

- 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編9 近代現代3』群馬県、1990年
- 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 資料編22 近代現代6』群馬県、1983年
- 前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第3巻（近世編）』前橋市、1975年
- 前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第4巻（近代・現代編（明治・大正期））』前橋市、1979年
- 前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第5巻（近代・現代編（昭和期））』前橋市、1984年
- 前橋市教育史編さん委員会編『前橋市教育史』上巻、前橋市、1986年
- 高崎市教育史編さん委員会編『高崎市教育史 上巻』高崎市教育委員会、1978年
- 高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 資料編10巻 近代・現代Ⅱ』高崎市（ぎょうせい）、1998年
- 伊勢崎市編『伊勢崎市史 通史編3 近現代』伊勢崎市（ぎょうせい）、1991年
- 伊勢崎市編『伊勢崎市史 資料編4 近現代Ⅰ』伊勢崎市（ぎょうせい）、1987年
- 桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史 上巻』桐生市教育委員会、1988年
- 桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史 下巻』桐生市教育委員会、1993年
- 草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第貳巻』草津町役場、1992年
- 前橋市立敷島小学校『敷島小学校百年史』前橋市立敷島小学校、1973年
- 前橋市立桃井小学校『桃井校百年のあゆみ』前橋市立桃井小学校、1973年
- 前橋市立中川小学校『中川小学校百年のあゆみ』前橋市立中川小学校、1974年
- 桃井尋常小学校『前橋市桃井尋常小学校 林間学校状況』大正12～13年度
- 桃井尋常小学校『前橋市桃井尋常小学校 林間学校会計簿』大正12～13年度
- 狩野壽平『私の学校衛生に対する半生涯』私家版、1938年
- 五十嵐誠祐『松風一学校保健の父 狩野壽平と林間学校』煥乎堂、1999年